『初夜』にみる女性の自己実現
イアン・マキューアンが描く人間の欲求

國 岡 なつみ

序論

イアン・マキューアン(Ian McEwan, 1948-)は、イギリス・ハンプシャー州生まれの小説家である。サセックス大学を卒業後、イースト・アングリア大学の創作コース修士号を取得し、1975 年に最初の短編集『最初の恋、最後の儀式』(*First Love, Last Rites*)で作家デビューを果たした。1978 年発表の最初の長編小説『セメント・ガーデン』(*The Cement Garden*)と 1981 年『異邦人たちの慰め』(*The Comfort of Strangers*)がブッカー賞候補となり、1998 年の『アムステルダム』(*Amsterdam*)で同賞を受賞している。さらに、2001 年に発表された『贖罪』(*Atonement*)は、ブッカー賞には選ばれなかったものの、全米批評家協会賞や W.H.スミス賞などの複数の賞を受賞したうえ、イギリスの大学受験において重要な A レベル試験の課題図書に選ばれるなど、まさにイギリス文学界では避けて通ることの出来ない作家となっている。『セメント・ガーデン』や『異邦人たちの慰め』さらに『贖罪』など映画化されている作品も多数ある。作家のジャイルズ・フォーデン(Giles Foden, 1967-)に“The British fiction scene this decade has been characterized by the dominance of Ian McEwan.”(ここ十年のイギリス小説界の特色はイアン・マキューアンの支配である)と言わせるほどの功績を残し続けている人物なのだ。

マキューアンのデビュー当時の作風は、近親相姦や幼児性愛、猟奇殺人

といったショッキングな内容を全面に出していた。しかし、1987 年発表の『時間の中の子供』(*The Child in Time*)以降、当時のイギリス政権への批判や、政治と宗教の問題を扱った社会性ある作風に変わっていき、現在では、日常に潜む狂気や不条理といった、人の心の内にある恐怖心や不安を取り上げる特徴を持った小説を描くようになっている。

そのマキューアンが 2007 年に発表した中編小説が、本論文で取り上げる『初夜』(*On Chesil Beach*)である。1962 年 7 月の英国、大学を卒業したばかりのエドワード(Edward)とフローレンス(Florence)はオクスフォードの街で出会い、1 年ほどの交際期間を経たこの日、新婚初夜を迎えた。彼らはこの日まで、ベッドを共にすることも、まして抱擁することさえままならない関係を保ち続けてきたのだが、それは婚前交渉をよしとしない時代背景があったからだけではなく、フローレンスがそうした行為に対し、言いようのない嫌悪感を抱いていたからなのであった。しかし、まだそうした気持ちや考えを口に出すことも、誰かに相談することも出来ない時代であったため、彼女はその秘密を誰にも打ち明けることが出来ないままエドワードとの新婚初夜を迎えてしまう。エドワードに愛してほしいという一心から、ベッドに向かいリードしたフローレンスだったが、その結果、彼らの初夜は失敗し、取り乱したフローレンスはホテルを飛び出してしまう。そこで 2 人は口論を続け、最終的にフローレンスはエドワードに背を向けその場を立ち去り、それきり彼らが顔を合わせることはなくなってしまうのである。

2 人が別々の人生を歩み始めて数年後、フローレンスは自らが作った弦楽四重奏団の第一ヴァイオリン奏者として、華々しくクラシック音楽界でのデビューを飾る。1960 年代英国は、解放の時代である。政治的にも、そして性的にも、自由を謳歌する若者が増え始めて英国が新しく生まれ変わった時代なのである。女性たちの間でも、結婚だけが幸せではない、という考えが浸透し始めたこの時代、新しい社会の中でフローレンスがヴァイオリニストとして成功したというのは、当時においては先進的な、女性音楽家としての自己実現の成功と言えるのではないだろうか。

本論文では、この女性の自己実現についての考察を進めていく。まず第1章において、マキューアンがこの小説のなかに織り込んだリアリティーと、それにより生み出される読者との認識の相違、アイロニーについて述べる。マキューアンは、現実に起きた事件や存在した人物を小説に登場させることで、読者が1960年代という時代設定を喚起しやすくしている。そうすることによって、現代の読者にアイロニーを感じさせることに成功しているのである。

第2章では、人間と無意識の欲求の関係について見ていく。過去の小説においてマキューアンは、フロイトの精神分析理論を取り入れながら、主に男性の性と暴力というテーマを取り上げてきた。本作では、同じテーマを提示しながらも、女性であるフローレンスを中心とした物語を描いている。幼少期の父親からの性暴力、そしてエドワードとの関係という性的な問題を経験し、自らの欲求を音楽へと昇華することでヴァイオリニストとして成功を収めたフローレンスの複雑な心理を描写しているのである。

そして、最終章となる第3章で、フローレンスがヴァイオリニストとして、この当時において先進的な女性の自己実現を果たしたことを証明する。フローレンスは、エドワードに象徴される因習的な男女の肉体関係から解放され、欲求を音楽に昇華することができたからこそ、社会的な成功と自己実現を達成することが出来たのである。さらに、この小説のなかで多く取り上げられるモーツァルトの弦楽五重奏曲第五番ニ長調との間テクスト性を指摘することで、この小説がこれまで述べてきたとおり、フローレンスに重点を置いた小説であるとの裏付けを行う。

第1章　アイロニカルな時代喚起

マキューアンは、現実の歴史的事項や、その時代の人々に影響を与えた文学や芸術といった嗜好品をフィクションの中に投影することで、リアリティーある小説を描き出している。『初夜』においても、エドワードとフローレンスの心理描写をする上で、こうした歴史的事実を小説の中核に配置

することで、読者との間に認識の違いを生み出し、アイロニーを引き立たせているのである。

１．英国の政治的解放

マキューアンは、歴史的事実や他の文学作品などを意識することにより、小説にリアリティーを与えている。『初夜』において彼の描き出すリアリティーは、そのままこの小説に感じられるアイロニーを際立たせる役割を担っているのである。

この小説が、ただ性をテーマにしただけのものとして片づけられない大きな理由として、読者に与えるアイロニーの存在が挙げられる。アイロニーについては、オックスフォード英語辞典(Oxford Dictionary of English)の中に"A literary technique, originally used in Greek tragedy, by which the full significance of a character's words or actions is clear to the audience or reader although unknown to the character."(もとはギリシャ悲劇において用いられていた文学的な手法で、登場人物の言動や行動の重要性が、観客や読者には明快なのに、当人にはそれがわかっていない状況のこと。)という定義がある。日本語でアイロニー、つまり「皮肉」という言葉を聞くと、「遠まわしに意地悪く弱点などを突くこと。あてこすり」(広辞苑)という意味が主流になっているが、ここで述べるアイロニーとは、一般的に日本語に訳したときに解釈されるそれとは異なり、小説の中で起きている事実に対する、登場人物と読者との認識の相違を表すものなのである。

まず、1960 年代は、政治的な意味において英国が解放という大きな変化を起こした時代である。その史実を小説に反映させることで、マキューアンはこの時代に生きた英国人と、この小説を読む現代人との意識間に相違を生み出している。

1951 年から続いてきた保守党の政権が終わりを迎えるのは 1964 年であるが、1960 年に入ってから、労働党勝利となるこの総選挙が行われるまでの間に、英国は威厳と規律ある大英帝国から、自由と解放に向けて大きく変わっていったと言って過言ではない。『初夜』の中でエドワードが、

> In a year or two, the older generation that still dreamed of Empire must surely give way to politicians like Gaitskell, Wilson, Crosland – new men with a vision of a modern country where there was equality and things actually got done. (25)(1～2 年後には、未だに帝国の夢を見ている古い世代はゲイツケルやウィルソン、クロスランドといった、平等で、物事が実際に行われる近代国家のビジョンを持った、新しい政治家たちに道を譲らなければならなくなる。)

このように考えている通り、“The blimps, still fighting the last war, still nostalgic for its discipline and privations. . .”(25)(頑固な反動主義者たちはまだ前回の戦争を戦っていて、規律と欠乏を懐かしがっている。)こう表現されているのが保守党勢力である。一方で、彼ら若い世代が求めているのは

> Edward and Florence's shared sense that one day soon the country would be transformed for the better, that youthful energies were pushing to escape, like steam under pressure, merged with the excitement of their own adventure together. (25)(エドワードとフローレンスは、もうすぐこの国はより良く変わっていくだろう、若いエネルギーが圧迫された蒸気のように噴き出して、彼ら自身の冒険の興奮と溶け合うだろう、という感覚を共有していた。)

こうした新しいエネルギーを解放する感覚、つまりは労働党勝利による新しい英国の始まりなのである。

しかし実際には、こうした新しい英国への最初の一歩を踏み出したのは労働党勢力ではなく、保守党のハロルド・マクミラン(Harold Macmillan, 1894-1986)であった。第二次世界大戦後、英国はアメリカ、ソ連と並んで世界の「三大国」(青山　238)であった。しかし 1957 年、スエズ戦争の失敗を受けてアンソニー・エデン(Anthony Eden, 1897-1977)が首相の座を辞

任、後任となったマクミランは、自らが在位した1957年から1963年までの間、対米関係の修復や南アフリカのアパルトヘイトの批判、そして英国のヨーロッパへの参入を試みた。

> Edward and Florence heard the muffled headlines and caught the name of the Prime Minister, and then a minute or two later his familiar voice raised in a speech. Harold Macmillan had been addressing a conference in Washington about the arms race and the need for a test-ban treaty. (24)(エドワードとフローレンスが、かすかに聞こえてくるニュース項目から首相の名を聞き取った1～2分後､聞きなれた彼の声がスピーチを読み上げた。ハロルド・マクミランは、ワシントンにおける会議で、軍拡競争と部分的核実験禁止条約の必要性を演説していた。)

このように､『初夜』の中にも彼の名前は登場している。つまり、この小説の中では､架空の人物であるエドワードとフローレンスの物語と並行して、実際に存在した歴史が進行しているのである。

　マクミランは1960年に｢変革の風｣演説を行い､英国領に独立を促した。この英国領の独立については小説の中でも触れられている｡“Every year the Empire shrank as another few countries took their rightful independence. Now there was almost nothing left, and the world belonged to the Americans and the Russians.”(24)(毎年、合法的に独立していく国があり、大英帝国は縮んでいた。今となってはほとんど何も残っておらず、世界はアメリカとソ連のものだった。)ここに書かれていることが、1960年のナイジェリア、61年の南アフリカ､62年のジャマイカと続く各国のイギリスからの独立を指しているのは明らかである。一方でマクミランは､｢イギリス経済の成長の鈍化に政治的な刺激を与えるために｣(青山　247)ヨーロッパ経済共同体 (EEC) への加入を申請した。この行動に対してフローレンスの父親は

> Harold Macmillan was a fool to be giving up the Empire without a struggle, a bloody fool not to impose wage restraint on the unions, and a pathetic bloody fool for thinking of going cap in hand to the Europeans, begging to join their sinister club. (53)(ハロルド・マクミランは、闘うことなく大英帝国を諦める馬鹿者で、労働組合に賃金抑制を課そうとしないとんでもない馬鹿で、ヨーロッパに媚びへつらい、彼らの不吉な連合体への加入を請う救いようのない大馬鹿者だ。)

とあるように、加入申請はふざけた行動であるとしてマクミランの政策を批判しており、フローレンスがこれに対して反論したがっている様子から、当時英国の変化と解放を望んでいたのが主に若者だけであったということが読み取れる。

　また、エドワードとフローレンスが出会うきっかけとなった核兵器廃絶運動(Campaign for Nuclear Disarmament, CND)についても、「ソ連の脅威にたいして、イギリスだけで大量報復を加えうるだけの強力なもの」(青山 245)であった核兵器を廃絶させようとする彼らとは対照的に、フローレンスの母親は

> …the Soviet Union was a cynical tyranny, a cruel and heartless state, responsible for genocide on a scale that even outdid Nazi Germany and for a vast, barely understood network of political prison camps. (52)(ソビエト連邦は利己的な専制国家で、非情で冷酷な国であり、ナチス・ドイツに勝る規模の組織的大量虐殺と、西側諸国ではほとんど理解されていないほど広く張りめぐらした政治犯収容所に対して責任を負うべきである。)

ここに書かれているように、イギリス以外の国の悪政に対する手段として、“If it could not be opposed, because we did not have the tanks and men to defend the north German plain, then it had to be deterred.”(53)(私たちは北ドイツ平

原を守るための戦車や兵隊を持っていないのだから、対抗できないのであれば抑止しなければならない。)と言っているところから、フローレンスとは異なり核兵器を所持することを容認する立場であり、CND の活動に反対であるということがわかる。一方のフローレンスは、そうしたソ連の行動に対し“It was and always had been for liberating the oppressed and standing up to fascism and the ravages of greedy capitalism.”(53)(ソ連は抑圧された人々を解放し、ファシズムや欲深い資本主義の破壊に立ち向かっている。)と考えている。ここに、両親とフローレンスとの間にある政治に対する意見の相違が見受けられる。

フローレンスの一家は、父親が会社経営、母親が哲学者であり大学教授であることから、いわゆる中流階級であったと考えることができる。中流階級の大人たちにとって、あくまで英国は他国に脅威を与えられるような立場にあり、かつ威厳ある孤立をしている国でなければならず、ヨーロッパやアメリカに媚びているようなマクミランの政策は気に入らなかったであろう。そうした考えを持った両親が、若い考えを吸収するフローレンスと異なる見解を持つのは当然のことだったのである。

しかし、彼女の家族はそれぞれに強い意志と意見を持ちながら、相違点について議論させることを楽しんでいるように見受けられる。“They [Geoffrey and Edward] would sit in the garden and talk politics…”(114)(彼らは庭に座って、政治について話した)とあるように、彼女の父親はエドワード相手にも政治の話をよく持ち出している。さらに母親も“He [Edward] chauffeured Violet around, once to a Schopenhauer symposium in Winchester, and on the way she grilled him about his interest in millenarian cults.”(117)(彼はヴァイオレットの運転手を務め、ウィンチェスターでのショーペンハウアー・シンポジウムまで送ったとき、その道中で彼女はエドワードに千年至福王国説の崇拝に対する彼の関心について、厳しく問うた。)ここから分かるように、エドワードの研究分野に合わせて、彼と政治的意見を交わそうとしていた。こうした話し合いを好む点から、彼らが自分たちの保守的な考えを若い世代に押し付けようとしているわけではないことがうかがえる。

このような自由選択が可能な家庭に育ったからこそ、彼女は両親と異なる意見を持っても、自己の意志を通し、CND に加入することができたのであろう。そして、既成概念に囚われない、自由で柔軟な考えを持ち、新しい英国へと踏み出す若者の一員となったのである。

一方、学校の教員をしていたエドワードの父親が政治的意見を口にする場面はほとんどなく、エドワードやフローレンスと意見を交わす場面もない。

> Because it was Sunday, his face was unshaven – Lionel had no religious beliefs, though he went through the motions at school. He liked to keep this one morning a week for himself. By not shaving on Sunday mornings, which was eccentric for a man in his position, he deliberately excluded himself from any form of public engagement. (71)(日曜日だったため、彼は髭を剃っていなかったー彼は宗教心を持っていなかったが、学校では形式的に行っていた。彼は一週間のうちこの朝だけは自分のものにしたがっていた。日曜の朝に髭を剃らないことで、彼のような立場の人間としては風変わりだったが、彼は社会的な取り決めの形から自らを解放していた。)

この部分から、エドワードの父親が社会的な決まり事に縛られていないことがよく分かる。むしろ宗教心すら持たず、日曜日だけでも自由でいたいと考えているのだ。こうした考えを持っているからこそ、仲睦まじい家族の中でも、エドワードはロック音楽を聴いたり CND に加入したりと自分の意志で行動し、自由な生活を送ることができたのであろう。エドワードとフローレンスはそれぞれに異なる家庭事情を持っているが、ともに自己の強い意志を持つ、新しい英国を築こうとする若者だったのである。

つまり、第二次世界大戦前後に生まれ、古い慣習や大英帝国の威厳ある孤立といった帝国主義的な考えを持たず、大人たちとは異なる意見を掲げた若者が集まり、行動を起こしたのが 1960 年代なのである。

実際の英国は、先に挙げたさまざまな政策を以て、「大英帝国の威厳を保ちながら」（青山　245）少しずつ英国の解放を進めていったのである。核兵器の生産と共にミサイル兵器の開発も行っていた英国は、「一九六二年、アメリカの新大統領ケネディとマクミランがナッソウで会談した時、イギリスは独自のミサイル開発を断念し、代わってアメリカのポラリス潜水艦を導入することに合意を見た。」（青山　246）とあるように、アメリカの力を借りて国防することを決定した。しかし、この会談を行った結果、英国は「ヨーロッパよりもアメリカとの関係を重視している」（青山　246）と見なされ、1963 年 EEC への加入申請を拒否されてしまう。

1962 年の秋にマクミランは病気のため辞職をする。彼のおこなった政策は、EEC への加入申請拒否で大きくバランスを失い、政府の評判も悪くなった。彼の後任となったホーム(Home, 1903–95)は、1964 年の総選挙までに政府を立て直すことができず､保守党の 13 年間にわたる政権は終わりを迎えることとなったのである。

マクミラン政権になるまで、大英帝国としての威厳を保ち、あえて孤立を選択し続けてきた英国は、彼の登場によって大きな変化を遂げた。「連邦からの安い食糧に代えてフランス産の高価な食糧を選ばねばならないという点では、明らかに EEC 加入はイギリスの損失を意味していたが」（青山　247）それでもヨーロッパに近付くという選択肢を選んだことで、英国国民の中には、規律と統制によって固められた大英帝国からの解放という意識が芽生えたのである。そして、その解放を受け入れ、新しい英国を築くべきだと考えていたのがエドワードやフローレンスといった若い世代だったのだ。一方で、この小説を読む 2007 年以降の現代の読者にとっては、こうした解放に対する認識は薄く、自らの意志や行動をある程度自由に選択できるのが当たり前のこととなっている。つまりマキューアンは、小説の舞台として設定した 1960 年代の英国の史実を小説内に反映することで､その時代を生きた若者達の考え方を呼び起こし、規律や統制に縛られることのない現代を生きる読者との間に意識の格差を生じさせているのである。

2. 英国の性の解放

第1章1で述べたように政治的に自由を求め始めた若者たちは、それと同時に文化の面でも自由を求めるようになった。そうして自由というキーワードを持った新しい文化の中で、性の解放という考えも芽生えていったのである。マキューアンは、この性の解放を背景に提示するため、主に 2 つの文献と1つのロックバンドを意識して『初夜』を書いた。それが、『チャタレー夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*)、ビートルズ(The Beatles)、そしてフィリップ・ラーキン(Philip Larkin, 1922-85)の詩「驚異の年」("Annus Mirabilis")である。

この3つが、『初夜』を描くに当たり当時の政治と同じくらい重要であることについては、アール.G.インガーソル(Earl G Ingersoll)が書評の中で述べている。

> …McEwan carefully chose 1962 as the time setting of *On Chesil Beach*, reviewers insistently remind us that Larkin focused on 1963 as the year "Sexual intercourse began" because it came shortly after the legalizing in the U.S. (1959) and the U.K. (1960) of the unexpurgated version of D. H. Lawrence's most (in)famous novel, Lady Chatterley's Lover, along with the appearance of Beatles on the scene.(マキューアンは『初夜』の時代設定として慎重に 1962 年を選んだ。批評家たちは読者に対しむきになって、ラーキンが「性交が始まった」年として 1963 年に焦点を当てたことを思い起こさせる。なぜなら 1963 年は、D.H.ローレンスの最も有名な小説『チャタレー夫人の恋人』の無修正版がアメリカ(1959 年)とイギリス(1960 年)で認められたすぐ後であり、加えてビートルズが登場した時代だからである。)

ここで彼が述べていることから分かるように、この3つとの関係なくしては、マキューアンが『初夜』の時代設定を 1962 年にした理由を説明することは困難なのである。そして、1962 年が文化の面でいかなる重要性を持っ

ていたのか理解することが、この小説のアイロニーをより理解することにもつながるのだ。

まず､この 1960 年代の性の解放という出来事に大きく影響を与えているのが、小説『チャタレー夫人の恋人』の解禁である。『チャタレー夫人の恋人』は、1928 年に発表された、英国人作家 D.H.ローレンス(D.H.Lawrence, 1885-1930)の作品である。当初、過激な性描写が問題となり一部を削除する形で修正版として出版されたこの小説は、長い時を経て、1960 年に英国の出版会社ペンギンブックス社(Penguin Books)が法廷闘争での勝利を得たことで、やっと無修正版の刊行が認められたのである(クラーク　298)。マキューアンは、1930-40 年代が主な舞台となっている、自身の 2 作前の小説『贖罪』でも、性的な欲望の気持ちを表現する手段として“a memory of reading the Orioli edition of *Lady Chatterley's Lover*, which he had bought under the counter in Soho”(169)(ソーホーの陳列棚の下に売っていた、オリオリ版の『チャタレー夫人の恋人』を読んだときの記憶)と、この本を引き合いに出している。ここで一般的に出回っていたのは修正版であり、無修正版を手に入れたロビー(Robbie)は、隠れてこの本を読んでいる、とされている。つまりこの『チャタレー夫人の恋人』は、1930 年代以降のイギリス文学において､性描写を取り上げる場合には常に注目を浴びる小説であり、マキューアンはそのことを常に念頭に置いているのだと考えられる。長いあいだ過激な描写を削除されていたその本が無修正で出版されたという事実が、1960 年代英国の性に対する認識を解放する一端を担ったのである。

この『チャタレー夫人の恋人』の解禁と同じくらい英国の性の解放を促したのが、ロックバンド、ビートルズの登場である。1962 年に「ラヴ・ミー・ドゥ」(“Love Me Do”)でレコードデビューを果たした彼らは、当時英国に親しまれていなかったタイプのポップミュージックをもたらし、若者から爆発的な人気を誇った。“Love, love me do / You know I love you / I'll always be true / So please love me do / Whao - ho love me do”(愛して、愛しておくれ／わかってるだろう、君を愛してる／いつまでも浮気はしない／だから愛してほしい／ウーウー愛しておくれ)直接的な恋愛感情を歌う音

楽の開放的な雰囲気と共に、それを聴く若者たちの行動も開放的になっていったのである。『初夜』でも、“Who would have predicted such transformations – the sudden guiltless elevation of sensual pleasure, the uncomplicated willingness of so many beautiful women?” (161)(誰がこんな変化を予測できただろうかー肉体的快楽の、突然の罪のない高まり、数多くの美しい女性の、単純な快諾)と、このように言われているのは 1960 年代の終わりになってからであり、エドワードとフローレンスが初夜を迎えたのは、その変化が起ころうとしている直前の時代だったのである。

1960 年代が性の解放の時代だったということは、「「翔んでる六〇年代」という型にはまった印象は、しばしば女性用の避妊用ピルの導入と結びついていた。」(クラーク　282)という考え方が存在することからもわかる。つまり、未婚の女性たちが避妊用ピルを服用することで、進んで男性との肉体関係を受け入れるようになったということなのである。この避妊用ピルについても『初夜』の中で取り上げられている。

> The Pill was a rumour in the newspapers, a ridiculous promise, another of those tall tales about America. The blues he had heard at the Hundred Club suggested to Edward that all round him, just out of sight, men of his age were leading explosive, untiring sex lives, rich with gratifications of every kind. (39)(ピルは新聞紙上の噂、ばかばかしい保証、アメリカについての信じられない物語のひとつだった。ハンドレッド・クラブで聴いたブルースは、彼の周り、目に見えないだけのところで、同い年の男たちが爆発的で疲れを知らない性生活を送っており、あらゆる満足感に満ちていると言っていた。)

当時学生生活を送っていたエドワードにとって、避妊用ピルはまだ遠い存在であった。彼の中ではまだ、女性と性的な関係を持つことは、直接結婚に結びつくことだったのである。しかし後に性の解放が叫ばれ、女性との性的な関係が直接結婚には結びつかない時代がやってくる。実際に小説内

でも、彼が30代になる頃にはそうした時代がやってきている。彼自身も、“He…lived through a chaotic, overlapping sequence of lovers, traveled through France with a woman who became his wife for three and a half years and lived with her in Paris.”(161)(彼は…混沌とした、一部重複した恋人たちとの間を過ごし、1人の女とはフランス中を旅して3年半の結婚生活を送り、パリで暮らした。)という、晩年に過去を振り返っている場面から分かるように、フローレンスとの結婚破棄の数年後には、そうした自由な恋愛を享受して生きていたのである。

ここでもう1つ、マキューアンが『初夜』を書くにあたり意識したと思われる文献の存在が重要となってくる。それが、詩人フィリップ・ラーキンの書いた詩である。彼は、「「性交は一九六三年に始まった」という見解のスポークスマン役を買って出た。」(クラーク　283)とも言われている。これはラーキンの「驚異の年」という詩の冒頭部分から引用されたものである。“Sexual intercourse began / In nineteen sixty-three / (which was rather late for me) - / Between the end of the “Chatterley” ban / And the Beatles’ first LP.”(Larkin, 34)(性交は／1963年に始まった／(それは私にとっては遅すぎたが)／それは『チャタレー夫人』の発禁の終わりと／ビートルズの最初のLP盤との間である)詩の内容と小説の時代設定の一致を見れば、マキューアンがこの詩を意識していたであろう事は容易に想像できるであろう。また、ラーキンも性の解放を考える上で、『チャタレー夫人の恋人』とビートルズの存在を重要視しているということが分かる。さらに、インガーソルは、

> Reviewers of the novel [*On Chesil Beach*] have introduced many readers, who were not even alive in 1962, to Philip Larkin’s poem “Annus Mirabilis” in which he suggests that the year 1963 marked a watershed in modern cultural history, ushering in The Sixties, with its connotations of the “sexual revolution”:(この小説の批評家たちは、1962年当時生きていなかった読者に向けて、フィリップ・ラーキンの詩「驚異の年」

> を紹介した。この中で彼は、「性革命」というニュアンスを伴う「60年代」を迎え入れた点で、1963 年は近代文化史上の分岐点である、と示唆している。）

と書いている。つまりこの小説を解放というテーマで読むにあたって、ラーキンの詩の存在は欠くことができないものであること、この時代に「性革命」が起きたという事実を理解しておくことは、批評家にとっては必要不可欠なのである。

フローレンスが提案した

> We could be together, live together, and if you wanted, really wanted, that's to say, whenever it happened, and of course it would happen, I would understand, more than that, I'd want it, I would because I want you to be happy and free.(155)(私たちは一緒にいられるし、一緒に生きていける。もしあなたがそれを望んでいるなら、本当にそれを望んでいるなら、つまり、他の人とそういうことが起きても、もちろん起きると思うけれど、私は理解できるし、むしろ私はそれを望んでいる、あなたが幸せで、自由であってほしいから。）

この言葉は、エドワードに衝撃を与える。"His indignation was so violent it sounded like triumph. 'My God! Florence. Have I got this right? You want me to go with other women! Is that it?'"(155)(彼の憤慨は激しく、まるで勝ち誇っているかのような響きを持っていた。「ああ！フローレンス。僕にその権利があるのか？君は僕に他の女性と寝てほしいのか！そういうことか？」）とあるように、この時には憤慨したエドワードだったが、数年後に彼女の言葉を思い返し、". . . it no longer seemed quite so ridiculous, and certainly not disgusting or insulting."(160)(それはもはやそんなに馬鹿げたことではないし、もちろん不愉快でも、侮辱的でもなかった。)と言っている。さらに、"In the new circumstances of the day, it appeared liberated, and far ahead of its

time, innocently generous, an act of self-sacrifice that he had quite failed to understand."(160)(その当時の新しい状況においては、それは解放された、先進的な無邪気で寛大な自己犠牲的な行動の現れで、彼はまったくそれを理解できなかった。)という後悔の念にもつながっているのである。エドワードとフローレンスが結婚した当時は性の解放が起こる直前であり、フローレンスの考え方は気違いじみたものとして捉えられたのである。しかし、現代を生きる読者にとって、彼女が言った言葉はエドワードのような怒りを覚えるものではないはずだ。もちろん、今の時代にも彼女の言葉に納得しない人間、憤りを覚える者は当然いるであろうが、世の中に多種多様な人間がいること、さまざまな愛の形、結婚の形が存在することを多くの人が理解しているため、エドワードほど憤慨することはないのである。

1960年代の英国は政治的意味合いだけでなく、性的にも解放の時代と言われている。マキューアンはそれをふまえた上で、エドワードとフローレンスの初夜を 1962 年という英国の変化が始まる前年に重ね合わせたのである。

現代の人たちは、性という問題に関して1960年代当時の人ほど厳格で崇高な考えを持っているわけではない。そのため、エドワードとフローレンスのやりとりに歯がゆさ、じれったさを感じる。そして、この歯がゆさやじれったさこそが、この小説におけるアイロニーとなるのである。

この小説のあとがきに、マキューアンは次のように書いている。

> The characters in this novel are inventions and bear no resemblance to people living or dead. Edward and Florence's hotel - just over a mile south of Abbotsbury, Dorset, occupying an elevated position in a field behind the beach car park - does not exist. (169)(この小説の登場人物は創作であり、生死どちらの人間にも似ていない。エドワードとフローレンスのホテルードーセット州アボツベリーの南1マイル、海岸の駐車場の後ろの高い位置に建っているーは実在しない。)

それほどまでに、この小説がリアリティーに溢れているということであり、そのリアリティーが確かなものであるからこそ、読者はこの小説にアイロニーを感じるのだ。読者は『初夜』を読み終わった後、設定された時代背景と、それに縛られた2人の若者の運命の両方について考えることとなるであろう。これこそ、近年のマキューアンが描こうとしている、リアリティーを駆使したアイロニー、日常に潜む不条理やそれに取り憑かれた人々の不安の姿なのである。

マキューアンは、ハロルド・マクミランをはじめとした現実の歴史的事項、そして『チャタレー夫人の恋人』やビートルズといった、実際に若者の心の動きに影響を与えたものをフィクションの中に投影することで、リアリティーある小説を完成させた。エドワードとフローレンスの心理描写をする上でこうした事実を小説の中核に配置することで、マキューアン独特のアイロニーが引き立つのである。

第2章　無意識の欲求に左右される人生

フローレンスの性に対する恐怖心は、幼少期における父親との関係により形成されたと推測することが出来る。マキューアンは、過去の作品において性と暴力というテーマを提示することで、主に男性の欲求と複雑な心理を描き出してきたが、本作『初夜』では、このテーマを暗示し、女性であるフローレンスが性的な問題により引き起こされた、結婚破棄という人生の挫折を克服することで、音楽家として成功を収めるまでの、女性の複雑な心理を描き出すことに成功している。

1. 暴力に投影される男性の欲求

マキューアンが、自らの作品の中で頻繁に使うモチーフのひとつとして、暴力的な男性のイメージがある。彼が描く小説の中に出てくる男性には、暴力的な一面を持つ人物が多い。男性が、その暴力的な欲求をいかなる形で昇華するかによって、またいかなるきっかけでその欲求が外部に漏れ出

すかによって、小説の流れが大きく変わるのである。

彼の初期の作品である『異邦人たちの慰め』では、英国人旅行者のコリン(Colin)よりも、現地に住むロベルト(Robert)の暴力的なイメージが強く描かれている。ロベルトが自分の妻に暴力をふるっているという描写もあることから、読者は彼に対して必ずといっていいほど暴力的な男性であるというイメージを持つだろう。また、現地の言葉がまったく分からないコリンがロベルトと一緒に外出した際、“Everyone we met, I told them that you are my lover, that Caroline is very jealous, and that we are coming here to drink and forget about her.”(81)(人に会うたびに、君のことを僕の愛人だと言っていたんだ。キャロラインがひどく嫉妬するから、ここに来て酒を飲み、彼女のことを忘れようとしているんだとね。)と、ロベルトがコリンに説明しているように、コリンを新しい恋人と紹介しながら街を歩いている場面からは、美しい顔立ちをしたコリンとは対照的にたくましく大きな体をしたロベルトが、まるでこの小説に出てくる唯一の男性であるかのように描かれていることが分かる。最終的にロベルトは、“‘See how easy it is,’ he [Robert] said, perhaps to himself, as he drew the razor lightly, almost playfully, across Colin’s wrist, opening wide the artery.”(96)(「ほら、なんて簡単なんだ。」と、ロベルトは、おそらく自分自身に対して言いながら、剃刀を軽く、ほとんどふざけているように、コリンの手首の上に引き、動脈が大きく開いた。)ここに書かれているように、剃刀の刃でいとも簡単にコリンの手首を切って殺してしまい、その直後に妻とともに行方をくらます。この場面でのロベルトのセリフからは、やろうと思えば簡単に人を殺せるという気持ちが表れているようである。人を殺す、というのは暴力の極みであり最終形態であると言えるだろう。最後の場面でひたすらに恋人メアリ(Mary)の安全を願い、なすすべなく、そしてあっけなく殺されたコリンには、マキューアンの描こうとする男性的な特徴は挙げられない。むしろ、ただ現実を受け止め、されるがまま、ロベルトの行う暴力を享受していた彼の妻のように力ない存在として描かれている。一方で、コリンを殺したロベルトは、暴力的な男性というイメージを最後まで貫き通すのである。この小

説において、ロベルトがコリンを殺した意図は明らかにされない。美しいものを傷つけたいという、男性の中に潜む不合理な暴力性がこの小説には投影されているようである。

また、マキューアンがブッカー賞を受賞した作品『アムステルダム』でも、こうした男性の暴力に対する本能的な欲求は払拭し切れていないように感じられる。『アムステルダム』の訳者である小山太一は訳者あとがきで、

> これまでのマキューアンはきわめてショッキングな題材を冷徹な手法で描き出すことを第一の特徴としてきたが（ことに彼の短編はレイプ・小児愛・人肉食などなど、さながらタブーの博物館といった感じがある）、本作『アムステルダム』はそれらとはいくぶん趣を異にする。(205)

と語り、さらに「クライヴにせよヴァーノンにせよ、一応の理性と良識を備えたman of the world（中略）だ。」(207)と言っているが、彼らは内に秘める暴力的な欲求を、仕事に情熱を注ぐことで昇華していただけであることが明らかとなる。ここに、フロイトの精神分析理論における、欲求の昇華という考えが反映されていると推測できる。

> 芸術家はあまりにも強い本能的欲求に駆り立てられるのであるが、これらを満足させ得る現実的手段が欠けている。そこで芸術家は、現実を見捨てて、その関心のすべてを空想生活の願望形成に転移する。（小此木　106）

フロイトによれば、芸術家は欲求を満たす手段として自らの芸術的才能を存分に発揮しているのである。つまり、『アムステルダム』に出てくるクライヴ(Clive)とヴァーノン(Vernon)は、欲求の捌け口としてそれぞれクラシック音楽の作曲と新聞の発行という各世界で仕事に熱中しているのだ。さらに、この2人の仕事ぶりは世間からも認められたものであり、彼らは当時

の社会に名を馳せていた有名人であった。それゆえに、彼らの欲求は仕事を続けることで無事に昇華され続けていたのである。

しかし、ヴァーノンが編集長を務める新聞の先行きが不安になり、クライヴの作曲途中の交響曲の進行が悪くなるというかたちで、彼らの仕事に対する問題が明らかになったとき、2 人の暴力的な欲求は昇華しきれなくなったのだ。そして、その結果として彼らは仲違いを始め、最終的にはお互いを殺すという行為に至ったのである。ここにも『異邦人たちの慰め』と同じく、殺人という暴力の最終形態が表れている。最初は読者に良識的な社会人というイメージを与えた 2 人が、最後には互いを殺してこの世を去ることで、この 2 人の内面に隠されていた、暴力的な欲求が表面に表れてくるのである。

マキューアンの小説に出てくる男性は、成功している芸術家や、人望の厚い仕事人間などが多い。しかし、そこにきっかけが与えられると、彼らの内に秘められていた無意識の欲求、とりわけ暴力的な欲求というものが外部に漏れだしてくるのである。

2. 肉体を解放された男性

『初夜』においては、エドワードの暴力的な一面が目立って描かれている。過去のマキューアンの作品とは異なり、こうした欲求を他に昇華出来なかったのがエドワードなのである。その一方で音楽家として自身の才能を存分に発揮したのはフローレンスである。フローレンスが過去のマキューアン作品における男性のような位置を占め、その隣でエドワードの存在が所在なく描かれていることで､この小説が過去の多くの作品とは異なり、女性の心理と人生をテーマにしたものであると捉えることができるのだ。

エドワードは、家族の中でも学校という組織の中でも、比較的おとなしい存在であったにも関わらず、昔から突発的に暴力をふるったり、街中で喧嘩をする癖があった。“Through his school years and into his time at college he was drawn now and then by the wild freedom of a fist fight.”(91)(中高生時代から大学に至るまで、彼はときどき殴り合いの激しい自由に惹きつけられ

た。)ここから分かるように、エドワードは時折暴力的になること、そして暴力をふるっている自分という存在に快感すら覚えていたのである。また、学生時代、友人が街中でふいに見知らぬ人からいたずらをされたときに、友人の敵をとるかのような勢いで殴りかかったこともある。

> With his [Edward's] right hand he gripped the man's shoulder and spun him round, and with his left, took him by the throat and pushed him back against a wall. The man's head clunked satisfyingly against a cast iron drainpipe. Still clenching his throat, Edward hit him in the face, just once, but very hard, with a closed fist. (94)
> (彼は右手で男の肩をつかんで振り向かせ、左手で喉元を抑えて壁に押し付けた。男の頭が鋳鉄製の排水管にゴツンとぶつかり満足のいく音を立てた。エドワードはまだ男の首を絞めつけたまま、一発だけ、しかし思い切り、男の顔を拳で殴った。)

珍しく自分に正当な理由があったとはいえ、彼は一方的に暴力をふるい、それがきっかけで友人に距離を置かれてしまう。このことにショックを受けたエドワードは

> Later on, Edward realised that what he had done was simply not cool, and his shame was all the greater. Street fighting did not go with poetry and irony, bebop or history. He was guilty of a lapse of taste. (95)
> (後に、エドワードは自分がしたことがまったくいかした行為ではなかったことに気付き、恥ずかしさは頂点に達した。街頭での喧嘩は詩やアイロニー、ビーバップや歴史とは合わないものなのだ。彼は品のなさという罪を犯したのだ。)

とあるように、今まで行ってきた突発的な暴力という行動が、自分が志していた芸術や学問といった知的な世界とはかけ離れていて、恥ずかしいだ

けの行為であることに気付いたのである。そしてこの事件が、フローレンスと結婚するまでの最後の喧嘩､最後の暴力的な行為となる。一見すると、この事件を受けて暴力をふるうこと自体に興味がわかなくなり、人間として落ち着きを持つようになったのだと捉えられるだろう。しかし、今までマキューアンが描いてきた男性たちとは違い、彼にはこの暴力的な欲求を昇華する当てがなかったのだ。歴史について学ぶことに興味を抱いていたエドワードだが、実際にそれは夢で終わり、彼が歴史学者になる日は来なかった。また、ロックンロールへの関わり方も、自分で楽器を演奏したりバンドを組んだりするのではなく、聴くという立場に徹することとなったのである。ここでも、過去のマキューアンの小説とは違い､『初夜』においては男女の立場が入れ替わっているということの証明ができる。1960 年代頃まで一般的とされてきた夫婦の役割分担は、男性が外で働き、その妻は陰で夫を支える、というものであり、つまり表舞台で脚光を浴びるのは男性、裏方の仕事を受け持つのが女性であった。後年のエドワードの生活を見ると、表舞台で音楽を演奏するロックンローラーたちについて批評を書き､音楽フェスを開催し､楽曲を販売する､といったいわゆる裏方の仕事､家庭内でいう妻の役割に似ている部分が多い。一方のフローレンスはヴァイオリニストとして社会的に脚光を浴びたのである。この点から、『初夜』における男女の立場が一般的なそれとは逆になっているということが分かるのである。

　フローレンスと付き合っていた頃には、彼がうまく昇華することのできなかった無意識の暴力的欲求は、すべてフローレンスへの愛という形で表れていたのであろう。彼女の体に触れることを日々夢見て、夢想することで暴力的な一面が抑えられていたのだ。また、音楽家として成功するという夢に向かって努力するフローレンスを見ることで感化され、叶えられることのなかった歴史家という自分の夢について熱く語っていたと捉えることもできる｡実際､フローレンスと別れた後のエドワードは､後年“What had he done with himself? He had drifted through, half asleep, inattentive, unambitious, unserious, childless, comfortable.”(163)(彼は彼自身をどうして

しまったのか。彼は漂うように、半分眠っているかのように、無頓着に、野心を持つことも、真剣さを持つこともなく、子供も持たずに気楽に生きた。)と振り返る程度の人生しか歩めなかったのである。エドワードはフローレンスとの結婚破棄の数年後、性の解放が謳われた世界で、自身の欲求に抗うことなく生活しているように描かれている。1963 年以降、徐々に肉体的快楽に対する欲望を表現することが可能となったために、彼が昇華することのできなかった欲求が、数々の女性と性的関係を持つことによって都合よく解放されたのである。だからこそ、不合理な欲求に飲まれることなく、暴力という行動に逃げることなく、彼はまるで眠っているかのように単調な人生を歩むことができたのだと考えることができるだろう。

この「眠っているかのよう」という言葉は、マキューアンの最初の長編小説『セメント・ガーデン』や『異邦人たちの慰め』を思い起こさせる。『セメント・ガーデン』の最後、両親を亡くした 4 人兄弟の長女ジュリー(Julie)が発する“‘wasn't that a lovely sleep.'”(138)(なんて素敵な眠りだったの。)という一言にもあるように、マキューアンは、発展や進歩もなくただ時間が過ぎていく様子を「眠っている」と表現することがあるのだ。また、このような、ただ単調に時間が過ぎていくだけという表現は『異邦人たちの慰め』の中にも登場している。Part 7 の始めは、以下のようになっている。

> During the next four days Colin and Mary did not leave the hotel except to cross the busy thoroughfare and take a table on the café pontoon which was in sunlight two hours before their own balcony. (59)
> (その後の 4 日間、コリンとメアリは、混雑した道路を渡って、彼らのバルコニーより 2 時間早く日が当たる浮船のカフェで席をとるとき以外は、ホテルを離れなかった。)

ろくにホテルから出ずに、バルコニーやカフェでしか過ごしていない時間というのは、観光客としては少し変わった光景であると言えるだろう。し

かし、ここにマキューアンが描く、発展も進歩もない、そしてこの場合は後に来る大きな事件の前の「眠っている」状態が表れているのである。『初夜』の最後でエドワードの人生も半分眠っているような状態だったと描かれているところから、エドワードについて、マキューアンが過去の作品と同じモチーフの変奏を提示しようとしていることが分かるだろう。

この小説では、自分の仕事に対する情熱が強かったのはむしろ女性であるフローレンスの方である。今までのマキューアンの小説では男性に強く見られていた、欲求の仕事への昇華が、ここではフローレンスに当てはめられているのだ。その一方で、エドワードは欲求を肉体的快楽という方法で満足させているのである。このように男女の立ち位置を過去の作品と交換することで、エドワードの欲求の所在なさが引き立つ結果となり、この小説の中心人物がフローレンスであるという捉え方が可能となるのである。

3. 精神を解放された女性

マキューアンの作品には、近親相姦や年長者からの性暴力を扱うものが目立つ。特に少年少女の性体験を取り上げ、彼らのその後の成長を見守ることで、小説に特異性を持たせているのである。本作『初夜』においても、フローレンスが幼少期に父親から性的虐待を受けていたのではないかと読み取れる部分がある。子供時代の記憶も働き、肉体的快楽を感じることの出来なかった彼女は、性の解放が謳われた世界で、欲求を肉体ではなく音楽という芸術的行為に昇華させ、音楽家としての成功を収めたのである。

まず、マキューアンが近親相姦を取り上げた作品を2つ取り上げる。ここに、日常に潜む狂気や不条理を描こうとするマキューアンの原点を見ることができる。それが、マキューアン最初の短編集『最初の恋、最後の儀式』の中の『自家調達』(*Homemade*)と、先に挙げた長編小説『セメント・ガーデン』である。この2作品においては、幼少期の描写のみで物語自体が終わってしまうため、成長するにつれて子供にいかなる精神的な影響が与えられるのか、といったテーマを見出すことはできない。しかし、これらが幼少期における性体験というテーマを小説の中に盛り込む、マキューー

アンの手法の基礎となる作品であることは明らかである。また、この作品は両方とも語り手である男性の視点から描写されているため、同性の立場で実験的にこのテーマを取り上げようとしているマキューアンの姿勢を見ることもできるだろう。

この2つの近親相姦をテーマとした作品を書いた後、マキューアンは年長者からの性暴力というテーマを盛り込んだ小説を発表する。それが『贖罪』である。この中では、主人公ブライオニー(Briony)のいとこローラ(Lola)の“He came up behind me, you see. He knocked me to the ground. . .and then. . .he pushed my head back and his hand was over my eyes. I couldn't actually, I wasn't able. . .”(214)(彼が私の後ろに来たの、わかるでしょ。彼が私を殴り倒して…それから…私の頭を後ろに押して、手で私の目を覆った。本当は私見えなかったの、私は見ることができなかったの。)という言葉に要約されているように、この時点では誰であるか明らかにされていないが、のちにマーシャル(Marshall)と判明する男からローラへの性暴力が描かれている。これが主要登場人物であるロビーとセシーリア(Cecilia)の人生を狂わせたと言っても過言ではないほどに、小説内で大きな役割を持っている場面である。

『贖罪』におけるローラは性暴力を受けたという事実に対して無言を貫き、その恐怖と屈辱を犯人への愛へと転化させてしまう。その結果、性暴力を犯した犯人であるマーシャルと後に結婚するのである。ここでは、主たる登場人物とは言えない人間同士の性と暴力の関係が、小説の流れを変えるポイントにまでなっていることが分かる。近親相姦を取り上げていた過去の2作品とは異なり、『贖罪』では性暴力を犯した男性マーシャルの心理描写はない。この小説全体が、ブライオニーという女性の書いた小説であるという設定から考えると、小説の作者と同性の人間の心理描写が細かく描かれているだけだという見方もできるが、その小説を書いているのは実際には男性であるマキューアンである。つまり、この辺りからマキューアンは、性と暴力というテーマにおける女性心理に焦点を当てて小説を描くようになったのだ。

近親相姦や年長者からの性暴力は、頻繁に明るみに出てくる問題ではないものの時代や場所に関係なく確かに存在している。そして、それが子供の精神的な成長に大きく関わることも明らかになっている。子供達はその経験を外部に知らせることもできず、自分の中で消化し、それぞれに性に対する考えを抱えて成長していくのである。『贖罪』におけるローラは、マーシャルから受けた性暴力に対して、犯人が彼であるということも、性暴力を受けたということ自体も、自分からは口に出さずに大人になっていく。彼女はこの性体験を自分の中に閉じ込め、解放することなくマーシャルへの愛へと転化させてしまったのである。初期の作品では男性心理とともに直接的な肉体の欲求の描写が目立っていたマキューアンだが、徐々に女性の目線と内向的な心理も反映させていっている。それにより、性暴力を行う側とその被害者の、両方の心理を描こうとしてきたのである。

そして本作『初夜』において、ついに女性の視点から見た性の問題というものを描き出したのである。それだけでなく、フローレンスはローラとは異なり、性体験を経ることで精神を解放し自己実現を果たしたのである。彼女は父親による性的な虐待があったのではないか、と読者に思わせるような描き方をされている。その父親との関係が、彼女の性に対する認識を形作ったと解釈できるのだ。

彼女は父親に対し、相反する感情を抱くことがあると述べている。

> There were times when she found him physically repellent and she could hardly bear the sight of him – his gleaming baldness, his tiny white hands, his restless schemes for improving his business and making even more money. (49)
> (時には父親に対して生理的に嫌悪感を感じ、彼の姿—光る禿頭や小さく白い手、ビジネスを改善しより多くの金を手に入れようと絶えず計画を立てている姿—を見ることをほとんど耐えがたく感じていた。)

ここでは彼女は父親の姿を見ることすら耐え難い、というほど彼の姿や仕事に対する考え方に嫌悪感を抱いている。その一方で、

> But sometimes, in a surge of protective feeling and guilty love, she would come up behind him where he sat and entwine her arms around his neck and kiss the top of his head and nuzzle him, linking his clean scent. (50)
> （しかし時に、保護したい感情とやましい愛情の波に突き動かされ、彼女は座っている父親の後ろに立って首に腕をからませ、彼の頭のてっぺんにキスをして、清潔なにおいをかいで鼻をこすりつけることがある。）

ここに書いてあるように、父親への愛情を態度で示すこともあるのだ。彼女は父親に対し、ときに嫌悪感に苛まれ、ときに言葉では説明のできない肉体的な愛着を抱いているのである。しかし、“She would do all this, then loathe herself for it later.”(50)(彼女はこれらすべてのことをした後に、彼女自身を嫌った。)とあるように、父親への愛情表現をした自分を後に嫌悪している様子からも、彼女自身こうした相反する感情に悩まされていることが分かるだろう。また、父親に対し忘れることのできない義理があるというのも、彼女を苦しめている要素の一つであるように見受けられる。

> Florence found it harder to contradict Geoffrey. She could never shake off a sense of awkward obligation to him. Among the privileges of her childhood was the keen attention that might have been directed at a brother, a son. (54)
> (フローレンスにとって、ジェフリーを否定することはより難しかった。彼女は、父親に対するやっかいな恩義の感情を払うことができなかった。彼女の幼少時代の特権は息子がいたならば彼に向けられるであろう父親からの特別な手当だった。）

音楽を続ける自分に惜しみなく金を出してくれる面や、この家族にもし息子がいたならばその恩恵はすべて息子が受けるであろうと思われる幼少時の外出の思い出など、彼女は父親からたくさんの愛情と期待を受けて育ってきたため、彼に対して義理を感じている。そのために政治的意見を求められた時や意見が対立した際に反論できないなど、フローレンスは常に父親の目を気にしているようにも感じられるのである。

彼女と父親との関係が普通ではない、特別なものであることは、エドワードも気付いているようである。“He thought they were intensely aware of each other though, and had the impression they exchanged glances when other people were talking, as though sharing a secret criticism.”(115)(けれども、彼らは互いに激しく意識しているようで、ほかの人が会話しているとき、秘密の批評を分かち持っているかのように視線を交わしているような印象があった。)ここで、エドワードの前では話したり触れあったりすることのないフローレンスと父親が、何か秘密を分け合っているような気がすると述べられている。つまり、この親子の特別な関係性は第 3 者の目から見ても明らかなものなのである。

ポンティング家の中でも特別父親に目をかけられていた長女のフローレンスは、子供の頃よく父親と 2 人きりで旅行に行った。新婚初夜、エドワードが服を脱ぐ音を聞きながらベッドに横たわっていたフローレンスは、12 歳の頃に行った父親との旅行の思い出を振り返っている。

> It was the smell of the sea that summoned it. She was twelve years old, lying still like this, waiting, shivering in the narrow bunk with polished mahogany sides. Her mind was a blank, she felt she was in disgrace. … It was late in the evening, and her father was moving about the dim cramped cabin, undressing, like Edward now. She remembered the rustle of clothes, the clink of a belt unfastened or of keys or loose change. Her only task was to keep her eyes closed and to think of a tune she liked. Or any tune. (99)

(それを思い起こしたのは海の匂いだった。彼女は 12 歳で、今と同じように横たわって待っていて、つやのあるマホガニーの側板の、狭い寝台の中で震えていた。彼女の心は空白で、不名誉なことになっていると感じていた。…夜遅い時間で、父親はほの暗く狭苦しい船室の中を歩き回り、今のエドワードと同じように服を脱いでいた。衣服の衣擦れの音や、ベルトを外す音、鍵や小銭の音を覚えていた。彼女に課されていたのは、目を閉じて、好きな曲のことを考えていることだった。或いは他のどんな曲でも。)

この一連の文章において、マキューアンははっきりそうとは書いていないが、服を脱いでベッドに入ってこようとしている「エドワードと同じように」父親が服を脱いでいる、という描写から、曖昧ながらも父親が彼女と性的関係を持とうとする直前を描いているように推測できる。この父親の性的虐待については、武藤哲郎も自身の論文の中で、上記と同じ場所を指摘し「彼女が幼い頃父親の虐待に会ったような意味にもとれて曖昧である。」(武藤　6) と述べている。もし、フローレンスが父親から性的虐待を受けていたのであれば、「彼女が性に恐怖を抱くのも当たり前のこととなる」(武藤　6) のである。

彼女が性に対して恐怖心を抱いている原因が父親であり、また一方で、12 歳という、精神的にも肉体的にも大人になりかけている年齢になってなお 2 人きりで旅行に行き、大きくなってからは惜しみなく金を渡して彼女の夢を支え、彼女の全てを知っているのも父親なのである。浜辺でエドワードと言い合いをしている最中、彼女は自分が言いたいことを和らげるために“Perhaps I should be psychoanalysed. Perhaps what I really need to do is kill my mother and marry my father.”(153)(ひょっとしたら、私は精神分析を受けるべきなのかもしれない。もしかしたら、私が本当にするべきことは、母を殺して、父と結婚することなのかもしれないわ。)このような冗談を言う。

ここに、フロイトのエディプス・コンプレックス、そして機知という概

念が関わってくる。エディプス・コンプレックスとは、ギリシャの悲劇詩人ソフォクレス(Sophocles, B.C.496?-406)が描いた『オイディプス王』(Oedipus)という悲劇に基づく精神分析理論であり、「異性の親に対する近親姦の願望と、同性の親に対する競争、憎悪、親殺しの願望であり、これらの願望に対する罪悪感の三つ」(小此木　214)のことを言う。ここでフロイトが提示した息子による父親殺しの願望が、ここでは娘であるフローレンスに見られる。のちにフロイトは、エディプス・コンプレックスの女性版の考え方として、娘の父親に対する性的思慕の念をエレクトラ・コンプレックスと名付けているが、マキューアンがそれを意識したであろうことは、彼が過去の作品においても精神分析理論を重要視していることから明らかである。

さらに、彼女はこの言葉を冗談で言っているが、フロイトの機知という理論によればここに彼女の深層心理が投影されているのだ。

> 冗談は暴露と攻撃に満ちており、無意味と言えども、記号としての機能を言語のただなかで混乱させたり、反抗したり破壊したりするところがある。これらの下心のある冗談の場合は、抑圧されていた欲動の満足、つまり禁止されている性欲や攻撃性などの代償的な満足が冗談の快感となり、あからさまな暴露をうまい言い回しによって受け入れ可能にするのが「冗談の仕事」なのである。(西園　152)

つまり、彼女のこの冗談の中には、自分が肉体的愛情を持てる可能性のある男性が父親のみであるという無意識の本心が表れているのである。エドワードとの性生活に見込みのない彼女は、彼に触れられること自体に恐怖を感じている。彼のスキンシップを、更に深い関係を求められる前の序章のように感じてしまうのである。恋人との関係に一種の恐怖を感じるだけでなく、自分の母親とすら抱き合ったりしない彼女が、ふと父親の頭にキスをしたり腕を回したりするということは、異常な光景として読者の目に止まるだけではなく、それだけ彼女にとって父親が特別な存在であるとい

う証拠となるのである。彼女の放ったこの言葉は、父親こそが自分の全てを知っている人間であるということ、また、決して誰にも言うことのできない秘密を分かち合った人間であるということの裏付けであるかのように捉えられる。マキューアンはフローレンスについて、幼少期に父親から性的虐待を受けていたかのように曖昧に描くことで、彼女の性に対する認識の複雑さを描いたのである。

以上のように、過去の作品を継ぎ性と暴力というテーマを暗示することで、『初夜』もまた、マキューアンの小説の特異性を醸し出している。そして、そこにフロイトの精神分析理論を関連付けることで、リアリズムの枠からはみ出ることなく人間の深層心理を描き出しているのである。『贖罪』のローラとは異なり、1963 年という解放の時代を生きたフローレンスは、性の経験と自らの欲求を音楽という芸術的行為に向けて解放したのである。それにより、彼女は音楽家として大成功を収めることが出来たのだ。

第 3 章　音楽を通しての女性の自己実現

フローレンスは、エドワードという 1 人の男性が象徴する因習的な男女の肉体関係から解放されたことで、1960 年代という時代においては先進的な、女性ヴァイオリニストとしての社会的な成功と自己実現を達成することが出来た。また、マキューアンは、『初夜』がそうしたフローレンス中心の物語であるということを深く印象づけるために、小説内のいたるところに彼女が演奏したクラシック音楽との関連性を示唆しているのである。

1. 女性音楽家としての自己実現と成功

フローレンスは、エドワードという 1 人の男性による束縛から解放されたことで、音楽家としての成功を収めることができた。結婚が破棄され、エドワードという存在が居なくなったことで、彼女の自己実現という欲求は音楽だけにまっすぐ向けられるようになったのである。つまり、彼女がエニスモア四重奏団(the Ennismore Quartet)で大きな名声を得ることができ

たのは、エドワードとの結婚が破棄されたことにも大きな要因がある。

音楽と関わっているときのフローレンスは、自信に満ちあふれ生き生きとしていた。中でも、彼女の堂々とした態度が強く出るのは、彼女自身が友人を集めて作りあげたエニスモア四重奏団で活動をしているときである。彼女が自らの欲求を解放し、自我を示すことができる場所がエニスモア四重奏団だったのである。

第一ヴァイオリン奏者である彼女は、自らを“the undisputed leader”(15)(誰もが認めるリーダー)であると自負しており、団員の中での些細な揉め事も自分の決断力で解決することを最善としていた。“whenever she was anxious or too self-conscious, her hand would rise repeatedly to her forehead to brush away an imaginary strand of hair,”(16)(彼女は不安に思ったり自意識過剰になったりすると、繰り返し手を額にやって想像上の編んだ髪の毛を払う)という彼女が、団員のチャールズ(Charles)と意見が食い違った際に、その仕草をすることもなく、“She did not argue, she listened calmly, then announced her decision.”(16)(彼女は主張することなく、落ち着いて彼の意見を聞き、それから結論を告げた。)このように、相手への敬意を忘れないながらも一方的に口論に終止符を打つほど、四重奏団で活動しているときの自分の決断には自信を持っていたのである。

また、音楽に関する限り彼女の決断が事態を良くない方向へと進ませたことはなかったため、彼女の自信は更に強いものとなっていったのであろう。その自信を１番顕著に表しているのが、エニスモア四重奏団でモーツァルトの弦楽五重奏曲を演奏するために、もう１人団員を増やす必要が出てきたときの場面である。

> It was the opening of a Mozart quintet, the cause of some dispute between Florence and her friends because playing it had meant drafting in another viola player and the others preferred to avoid complications.(80) (それはモーツァルトの五重奏曲の冒頭部分で、彼女が友人たちと議論した原因の曲だった。この曲を演奏するにはもう１人別のヴィオ

ラ奏者を引き入れる必要があったが、他の団員は複雑化することを避けたがっていた。）

日常生活の中で、自分以外の全員の反対を受けるような場面になれば、フローレンスは多数の意見を聞き入れ自分を押し殺していたであろう。しかし彼女は、団員全員が快く思っていない、というこの状況にも屈することはなかったのである。

> But Florence insisted, she wanted someone for this piece, and when she invited a girlfriend from her corridor to join them for a rehearsal and they sight-read it through, naturally the cellist in his vanity fell for it, and soon enough the others came under its spell.(80)
> (それでもフローレンスはこの曲のためには誰かが必要であると主張し、女友達を１人リハーサルに招いた。そしてその場で全体を演奏してみると、思っていたとおり、虚栄心の強いチェロ奏者はそれに惚れ込み、すぐに他の団員もその魅力にとらわれた。）

こうして、無事に他の団員たちをも魅了するほどの腕を持つヴィオラ奏者を四重奏団に引き入れることに成功したフローレンスは、この時のことについて、

> If the opening phrase posed a difficult question about the cohesion of the Ennismore Quartet - named after the address of the girls' hostel - it was settled by Florence's resolve in the face of opposition, one against three, and her tough-minded sense of her own good taste.(80)
> (その冒頭のフレーズは、エニスモア四重奏団－彼女たちの寄宿寮の住所に因み名付けられた－の結束に難しい問題を提示したが、それは１対３の対立に直面したときのフローレンスの決心と、自分の審美眼に対する強い意志によって解決したのだ。）

このように考えていて、それによって音楽と四重奏団の活動に対する更なる自信を得たのであった。

そうした一方で、エドワードと居るときのフローレンスは、彼を失いたくない、絶望させたくないという思いから、必死に自分の本当の気持ちを隠す傾向にあった。実際に、新婚初夜のベッドルームで"The Florence who led her quartet, who coolly imposed her will, would never meekly submit to conventional expectations."(81)(四重奏団を率い、冷静に自分の意志を通すフローレンスは、因習的な期待におとなしく従ったりはしない。)という自分を思い出し、勇気をふりしぼって肉体関係を拒否しようとしたにもかかわらず、"Then, at the sound of a floorboard, she turned, and he was coming towards her, smiling, his beautiful face a little pink, and the liberating idea – as if never quite her own – was gone."(81)(そのとき、床板の音がして彼女が振り返ると、エドワードが微笑みながら近付いてきた。彼の美しい顔はほのかにピンク色で、解放という考えは、彼女自身の考えではないかのように、消え去ってしまった。)と書かれているように、エドワードの顔を見た瞬間にその考えを失ってしまっている。これについては、フローレンスがエドワードの顔色を伺って生活していることや、エドワードの求めることを全て受け入れる妻であろうとする心理も働いているのであろう。エドワードを傷つけまいとする思いを尊重するあまり、自我というものが押し殺されているのである。

もしも彼らの関係が壊れることなく結婚生活を続けていたら、おそらく無意識のうちに、フローレンスがエドワードの為に自我を押し殺す場面は増えたであろう。家族への愛情が見えない自分の母親に対する反発の意味も込め、彼女はエドワードを何よりも大切にしたはずである。その結果、彼女がエニスモア四重奏団の練習を疎かにしてしまうであろうこと、自我を押し殺すことで感受性豊かな音楽が演奏できなくなるであろうことは明らかである。

つまり、彼女にとってエニスモア四重奏団での活動は、自らの自由と威

厳、自信を存分に見せつけることができる最高の場所だったのである。団員が自分に対して一目置いていて、ときに口論はしても、最後には自分の決断力によって、全てが望む形に出来上がっていくというのは、彼女に安心できる幸せを与えていたのだろう。

エニスモア四重奏団は、こうした彼女の決断力とリーダーシップがあってこそ、ウィグモア・ホール(the Wigmore Hall)でデビューを飾れるまでに成長したのである。ウィグモア・ホールは、1901 年に建築されたベヒシュタイン・ホール(the Bechstein Hall)が基になっている音楽ホールであり、早くから室内楽、器楽、声楽を演奏する場としては最高峰のホールの 1 つとされていた。ヨーロッパで活躍する数多くの演奏家たちが舞台に上ったことのある、演奏家にとっては夢の舞台なのである。フローレンスがこの舞台を夢見て音楽に情熱を注ぎ、四重奏団において自らの意志を通した結果が、“the Ennismore Quartet would perform here[the Wigmore Hall], play beautifully and triumph”(125)(エニスモア四重奏団がここで公演をして、素晴らしい演奏をして大成功を収めてみせる。)という夢を叶えることに繋がったのだ。

20 世紀末以降イギリスでは、結婚願望を抱かない独立した女性や結婚に踏み切らないカップルは増加してきている。女性にとっての幸せが結婚だけでないという認識が広まったこと、また、結婚という選択肢を取らなくても、一緒にいたい人と生活し、子供を産み育てるということが可能であることが、結婚率の低下を招いているのであろう。イギリス統計局によると、『初夜』の舞台である 1960 年頃のイギリスにおいては、結婚件数は約 40 万件であったが、『初夜』発刊の前年である 2006 年には、その数が約 23 万 7000 件にまで落ちている。その一方で、結婚という形式的な関係を求めずに共に暮らし続ける、事実婚というスタイルを持つ男女は、2006 年度で全国に推定約 230 万組いるとされているのである。この統計からみても、法的な婚姻届を出していない事実婚カップルの多さは歴然である。また、結婚していても別々の家で生活する夫婦が存在することもあり、男女間の関係は多種多様になっているのである。もちろん男女の関係だけではなく、

男と男、あるいは女と女、という恋愛の形も徐々に認められてきている。実際に『初夜』の中でフローレンスが、“Mummy knows two homosexuals, they live in a flat together, like man and wife. Two men. In Oxford, in Beaumont Street. They’re very quiet about it.”(154)(母は2人のホモセクシュアルを知っているわ。彼らは1つのフラットで共に暮らしている。まるで夫とその妻のように。2 人の男が。オクスフォードのボーモント・ストリートで。彼らはそのことについて黙っているわ。)と述べていることから、既に 1960 年代には、こうした自由の発端が存在していたと言える。更に彼女は

> And we can make our own rules too. It’s because I know you love me that I can actually say this. What I mean, it’s this - Edward, I love you, and we don’t have to be like everyone, I mean, no one, no one at all . . . no one would know what we did or didn’t do.”(154)
> (私たちにも独自のルールを作れるわ。あなたが私を愛していると知っているから、こんなことを実際に言えるの。つまり私が言いたいのは、エドワード、私はあなたを愛していて、私たちはみんなと同じようにしなければいけないわけじゃない、誰とも、少しもね…誰も私たちが何をしているか、あるいはしていないか、知ることはないの。)

と言って、自分たちにも自由な関係をもたらそうとしている。エドワードがこれに怒り狂ったことで2人は別れてしまうのだが、彼らが現代に生きていたら、少なくともあと数年後、性の解放が浸透した世界に生きていたら、フローレンスが“That I’m pretty hopeless, absolutely hopeless at sex. Not only am I no good at it, I don’t seem to need it like other people, like you do.”(153)(私には望みがない、セックスに対してはまったく望みがないの。得意ではないと言うだけじゃなくて、私は他の人のように、あなたのように、それを必要としていないみたいなの。)という、性に対する気持ちを新婚初夜以前にエドワードに話すことが容易になっただけではなく、エドワ

ードにもこの自由の意味が伝わり、彼との関係とエニスモア四重奏団の両方を大切にすることも可能だっただろう。

さらに、この2人の恋愛観の相違は、互いの母親の影響も受けていると考えられる。フローレンスの母親は大学教授として成功を収め、成功したビジネスマンの夫とともに大きな家に住み、家族との関係よりも自分の仕事を大切にしているように描写されている。家事は主にお手伝いの人間が来て行っているようであり、娘たちへの愛情表現もない。フローレンスがヴァイオリンの練習をしている音も、自分の仕事の邪魔になると思っているようで、"'Darling, I'm still not finished for today. Could you bear to delay your screeching until after tea?'"(49)(私は今日やることがまだ終わってないの。キーキー音を立てるのは、お茶のあとまで我慢してもらえないかしら。)と言っており、フローレンスの練習に対して不満を持っている様子さえうかがえる。つまり、フローレンスは愛情に溢れた母親というものを知らず、仕事一筋の母親を見て育っているのである。彼女の母親が教授をしているオックスフォード大学を例に取れば、女子寮が新設されたのは1800年代後半、女子学生に大学試験が許されたのは1894年になってからであり、さらに学位が認められたのは、1921年になってからである。小説の舞台が1962年であることを考えると、まだ学位授与が開始してから40年あまりしか経っておらず、そうした新しい世界で教授として名を馳せているフローレンスの母親がいかに努力し、逆境の中で地位を得たのかが想像できる。フローレンスは、働く女性という、当時先進的な母親のもとで育ってきたため、こうした新しい恋愛観を受け入れることができていたのであろう。

一方のエドワードの母親は、彼が5歳の頃に事故にあって脳損傷という障害を負ったため、一般的な母親のように家事を行うことが出来ない。その為、父親のライオネルが家事を切り盛りしている状態なのである。しかし、"… at the end of every meal, the children and their father would thank her."(68)(毎食後には、子供たちと父親が、彼女に感謝した。)とあるように、まるで母親がこの家を取り仕切っているかのように、家族全員で芝居を行っていたのである。小さな家で家事をこなしながら夫を支える母親がいる、

愛情溢れる家庭という“an elaborate fairy tale”(67)(入念に作られたおとぎ話)の中で、エドワードは育ってきたのである。

> She certainly had her moments of anxiety, panicky attacks when her breathing came in snatches and her thin arms would rise and fall at her side, and all her attention was suddenly on her children, on a specific need she knew she must immediately address.(66)
> (彼女ももちろん不安に襲われる瞬間があり、パニックの発作で息がとぎれとぎれになり、細い腕を体の横で上下させることがある。また彼女の注意が突然子供たちに向けられ、ただちに特定の何かをする必要があると言い出すこともあった。)

この部分から分かるように、彼女は子供たちに対する愛情に溢れているようである。こうした家庭に育ってきたエドワードにとっては、実際にそれが作られた生活の中であっても、母親というものは常に家にいて家事全般を担い、家族を守り支える存在だったのである。だからこそ、彼はフローレンスの提示する新しい男女関係の在り方を素直に受け入れることができなかったのであろう。こうした母親の違い、育ってきた環境の違いが、2人の恋愛観に対する相違を生み、結果として結婚破綻へと繋がったのである。古典音楽を愛するフローレンスが新しい恋愛観に寛容で、新しい音楽であるロックンロールを愛するエドワードが、古い考えに囚われていたところには、第1章で述べた部分とはまた別のアイロニーを感じることも出来るであろう。

しかし、この結婚破綻という経験がフローレンスにとってまったく意味のないものになることは決してなかった。後年のエドワードについて書かれている中に、フローレンスの気持ちを描いている部分がある。

> He did not know, or would not have cared to know, that as she ran away from him, certain in her distress that she was about to lose him, she had

> never loved him more, or more hopelessly, and that the sound of his voice would have been a deliverance, and she would have turned back.(166)
> (彼は知らなかったし知ろうともしなかったが、彼のそばから走り去りながら、彼女は苦悩の中で、今にも彼を失おうとしているが、彼をこんなに愛したことは、どうしようもなく愛したことはなかったし、彼の一声があれば、それが救いとなり、自分は振り返るに違いないと確信していた。)

こう表現されるほど愛した人との結婚破棄という苦しい経験は、彼女に悲しみだけでなく、人間的な成長ももたらしたはずである。この恋愛経験がなければ､自らの思いを解放して音楽に昇華することはなかっただろうし、それなくしては、フローレンスが批評家に、人生にまで恋をしているようなヴァイオリンという素晴らしい賞賛をもらうこともなかったはずである。

マン・レイ(Man Ray, 1890-1976)という芸術家が、1924 年に発表した「アングルのヴァイオリン」(Violon d'Ingres)図1という芸術作品がある。女性の後ろ姿に f 字孔を描き、その身体をヴァイオリンに見立てているものである。フライア・ホフマンが述べるとおり、この写真からも連想することができる、女性の身体に似た形をしているこの楽器は、ヨーロッパ社会において､長らく男性が演奏するのにふさわしい楽器とされてきた｡「ヴァイオリンは「楽器のなかの女王」として音楽の世界に君臨してきた」(ホフマン 222)のであり、

> 偉大なヴァイオリニストたちが聴衆の心を激しく揺さぶることができたのは、女性の身体と重ね合わせてイメージされている楽器のボディを、男性奏者が自身の手で響かせ、魔術師のごとき名人芸でそれを演奏することができたから(ホフマン　223)

だと考えられてきた。

図 1

20 世紀の初めにもこの考えは根強く残っており、女性がヴァイオリンを弾くことに関し辛辣な言葉を述べる評者が数多く存在した。写真や絵画、オブジェなどの様々な分野で新しい技法を取り入れ、モダンアートの先駆者と呼ばれるほど前衛的な美術家であったマン・レイによる作品「アングルのヴァイオリン」の作成時期が 1924 年であることを考慮すると、1900 年代にもヴァイオリンと女性の身体を結び付けて捉えることは一般的だったのであろう。そうした世界で、フローレンスが女性ヴァイオリニストとして大きな名声を手にしたことは、彼女の母親が大学教授として成し遂げたことと同じように、女性のクラシック音楽界での成功という先進的なことだったのである。

この小説の中で、1960 年代はヴィクトリア朝的な価値観というものを引きずっていた英国の政治的解放と性の解放が始まった時代だと謳われているが、フローレンスもエドワードとの因習的な男女関係から解放されたという見方をすることができる。エドワードのことを愛していたのは事実であるが、性に関する解決できない悩みを抱えた彼との関係から解放されたことで、彼女は音楽に身を置き、欲求を音楽に昇華させることが出来たのである。つまり、彼女はエドワードという 1 人の男性が象徴する因習的な男女の肉体関係から解放されたことで、この時代においては先進的な、女

性の自己実現と、人間としての社会的な成功を収めることができたのだ。

2. 弦楽五重奏曲との間テクスト性

この小説の中で、フローレンスが結成するのは四重奏団であるが、重要な役割を担っている楽曲はモーツァルトの弦楽五重奏曲第五番ニ長調である。この楽曲は、エドワードとフローレンスを強く結んだ曲でもあり、彼女の音楽家としての才能を認められた曲でもあり、彼女の人生そのものを表している曲でもある。彼女が結成したのが四重奏団であるにもかかわらず、五重奏の曲がもっとも印象的に描かれているのには理由があるのだ。

モーツァルトは弦楽での長調の五重奏曲を4作品遺しているが、そのうちで五重奏曲第三番ハ長調と並び偉大な作品であると言われているのが、晩年に作られたこの五重奏曲第五番ニ長調である。この作品は、ハイドンの管弦楽団にいたヴァイオリニストの為に作ったとされていて、第一ヴァイオリンが際立つ曲になっている。それゆえに、フローレンスのヴァイオリニストとしての魅力も存分に発揮されたのであろう。

五重奏曲第五番ニ長調の中には「全ての五重奏曲を探してもないであろう最も信じがたいパッセージが展開部の中ほどに」（ザスロー　323）存在している。それは、アダージョ楽章の「下行する 3 度の使用」（ザスロー 323）の強調であり、「メヌエットはアダージョ楽章の下行する3度の動機を引き継ぎ、後半でこの主題による厳格カノンを導く。」（ザスロー　323）とされている。このカノンについては、『初夜』の中でも取り上げられている。“They [the Ennismore Quartet] commanded with magisterial ease the full panoply of harmonic and dynamic effects and rich contrapuntal writing that typifies Mozart’s late style.”(162)(彼らは威厳あるゆとりをもって、多種多様な和声と強弱法の効果、対位法的な作品といったモーツァルトの後期スタイルの典型を操った。)ここに書かれている contrapuntal が、カノンであると考えられる。

カノンとは、第 1 声部旋律を第 2・第 3 などの声部が対位法により、忠実に模倣しつつ進む楽曲の形式のことを言う。この対位法的な呼びかけと

応答は、小説の中でフローレンスの無意識下にある感情を表現するときに登場する。その１つ目は、エドワードをベッドルームに呼び入れる場面である。

> Because the instrument was a cello rather than her violin, the interrogator was not herself but a detached observer, mildly incredulous, but insistent too, for after a brief silence and a lingering, unconvincing reply from the other instruments, the cello put the question again, in different terms, on a different chord, and then again, and again, and each time received a doubtful answer. (80)
> (楽器は彼女のヴァイオリンではなくチェロだったので、質問者は彼女ではなく、少し疑い深く執拗でもある冷静な観察者である。つかの間の静寂の後、他の楽器によるぐずついた、説得力のない応答が続いた。チェロは異なる表現で、異なる和音で、何度も質問を投げかけ、その度に不安げな答えを受け取っていた。)

自ら進んでベッドルームへと足を運んだフローレンスは、まだ、これから起こることに対しての緊張を感じることもなく、靴を脱いでいる。“She was aware of her husband’s enchanted gaze, but for the moment she did not feel quite so agitated or pressured.”(79)(彼女は夫のうっとりとした視線には気付いていたが、この瞬間はまだ、彼女はそんなに動揺していなかったし、プレッシャーも感じていなかった。)ここで、フローレンスがまだ肉体関係に対する嫌悪感を意識していないことから分かるように、彼女は自分自身の感情が無意識の状態にあるとき、頭の中でこの質問と応答の対位法的フレーズを感じていたのである。そしてもう１つは、初夜の行為が失敗に終わり、発狂して取り乱したあげく浜辺に逃げ出したフローレンスを追ってエドワードがやってきたときに、彼女が彼と口論をする場面である。

> She heard herself say smoothly, ‘I know failure when I see it.’ But it was

not what she meant, this cruelty was not her at all. This was merely the second violin answering the first, a rhetorical parry provoked by the suddenness, the precision of his attack, the sneer she heard in all his repeated ‘you’s. (144)
(自分がすらすらと言う声が聞こえた。「見れば失敗は分かるわ。」しかしそれは、彼女が言おうとしたことではなく、この残酷さはまったく彼女らしくなかった。ただ、第二ヴァイオリンが第一ヴァイオリンに答えただけで、この修辞的な受け流しをしたのは、彼の攻撃が突然で正確だったから、彼が何度も繰り返す「君は」に冷笑的表現を聞き取ったからだった。)

エドワードの言葉に対して、怒りを覚えたフローレンスは間髪を入れずに返事をする。とっさに口をついて出た言葉に対して、彼女は対位法のようだと考えているのだ。どちらも、自分の本当の感情や意見が意識下にないときに、対位法的旋律が頭をよぎっているのである。1 つ目のメロディーに関しては、後に来る“It was the opening of a Mozart quintet”(80)(これはモーツァルトの五重奏曲のオープニングだ)という部分から、実際にこの音階が五重奏曲第五番ニ長調の冒頭のフレーズそのものとなっていることが分かる。ここから、彼女が五重奏曲第五番ニ長調に特別な思い入れを持っているであろうことが読み取れる。さらに 2 つ目のメロディーに関しては、ここで、彼女が性に対する恐怖心を告白したことで 2 人の関係が終わってしまうことを考慮すると、小説の中で最も感情豊かで素直なフローレンスの姿を見ることができる場面でもあるのである。

対位法は、物語の中だけでなく小説全体の構造にも存在する。この小説の主人公たる人物はエドワードとフローレンスの 2 人であり、小説自体がこの 2 人のこれまでの人生や、初夜における心の変化を順番に描き出すスタイルとなっているのである。たとえば“They did not meet until their London courses were over,”(43)(彼らはロンドンでの学業が終わるまで会わなかった)で始まる、約 4 ページにわたるエドワードの期末試験後の生活を

描き出した後、“She too was restless at home,”(48)(彼女も家では落ち着けなかった)の部分からは、同じ頃のフローレンスの生活が描かれている。また、初夜当日についても、“Her [Florence's] husband was smiling and standing and ceremoniously extending his hand across the table.”(27)(彼女の夫は微笑みながら立ち上がり、テーブル越しに仰々しく手を差し出した。)から始まる 2 つのパラグラフはエドワードについて、続く“She [Florence] made herself remember how much she loved this man.”(28)(彼女は自分がいかにこの男を愛しているか忘れないようにした。)からの 3 パラグラフはフローレンスについて、更に続く“When he heard her moan, Edward knew that his happiness was almost complete.”(30)(彼女のうめき声を聴いたとき、エドワードは彼の幸せがほぼ完全なものになったと感じた。)からは再びエドワードについて、というように、2 人の心情が対位法的に描かれている。こうして順番に 2 人の生活や心情を語ることで、マキューアンはどちらに重きを置くこともなく互いに呼応する、対位法的な小説を作り出しているのである。以上の点から、対位法という音楽の形式が、比喩的に小説の構成に投影されていることが分かる。

1968 年、エニスモア四重奏団のデビュー公演は大成功する。彼らは“The *Times* critic welcomed the arrival of 'fresh blood, youthful passion to the current scene.'”(162)(『タイムズ紙』の批評家は「現代シーンへの新鮮な血、若い情熱」の登場を歓迎した。)と批評された。中でもモーツァルトの五重奏曲第五番ニ長調におけるフローレンスの評価は、音楽だけでなく人生に恋をしているような、感情豊かなフレーズを引き出しているという素晴らしいものだった。

> Then came a searingly expressive Adagio of consummate beauty and spiritual power. Miss Ponting, in the lilting tenderness of her tone and the lyrical delicacy of her phrasing, played, if I may put it this way, like a woman in love, not only with Mozart, or with music, but with life itself.(162)

(そして、燃えるように表情豊かなアダージョは、完成された美しさと神聖な力をもたらした。ミス・ポンティングは、その音色の軽快な柔らかさとフレーズの情熱的な繊細さで、このように表現していいのなら、モーツァルトだけにでなく、音楽にだけでもなく、人生そのものに恋している女性のようであった。)

この批評家の言葉によれば、彼女のヴァイオリニストとしての評価は、その年齢に似つかわしくないほど完成されたものであったと言えるだろう。クラシックに興味のなかったエドワードが、"Edward was struck by the sheer volume, and the muscularity of the sound, and the velvety interleaving of the instruments, and for minutes on end he actually enjoyed the music"(126)(エドワードは、独特な音量と音響のたくましさ、楽器の柔らかな挿入に心を打たれ、数分間、彼は実際にその音楽を楽しんだ。)というほど気に入った曲を演奏するときのフローレンスの紡ぎ出す音が美しかったのは、彼女のエドワードに対する思いが少なからず込められていたからと捉えることができる。他の曲についてのヴァイオリンに特筆した批評が見受けられないことから、彼女のヴァイオリニストとしての才能は、この曲によって世間に認められたと言えるだろう。

また、モーツァルトの五重奏曲第五番ニ長調は、そのものがフローレンスの人生を表しているような曲になっている。この曲はまず初めに、チェロを主体とするアレグロの楽章がある。これは先に述べたように、肉体関係を強く望むエドワードとベッドルームで駆け引きをしているかのようなフローレンスの行動に当てはまっている。つまり、このアレグロの部分は"mess"(151)(めちゃくちゃ)な状態になる前までを表しているのだ。次に始まるアダージョでは、チェロとヴァイオリンの掛け合いが印象的な章であり、これは浜辺で口論をするエドワードとフローレンスを表しているようでもある。アダージョを演奏するフローレンスのヴァイオリンが表情豊かであると高く評価されたことからも分かるように、ここでは感情を素直に表現するフローレンスの姿を見ることが出来る。第3楽章となるメヌエッ

トは、アダージョの流れを引き継ぎながらもフィナーレへの繋ぎとなるために、後半に先に述べた厳格カノンを含んでいる。これをエドワードと別れた後のフローレンスであると見ると、彼女がエニスモア四重奏団で成功を収めるまでの、小説には書かれていない人生の繋ぎ目として捉えることができるであろう。アダージョの流れを引き継いでいるという部分からは、エドワードのことを振り返るフローレンスを連想することが出来るが、それでも前を向き、四重奏団の未来に向かって前進していく彼女の姿と重ねられる楽章となっているのである。そして最終楽章となるアレグロがくる。明るく躍動感のあるこの楽章はエニスモア四重奏団で成功を収め、夢だったウィグモア・ホールでの演奏をしている彼女の華やかな姿を想像することができる。五重奏曲の壮大なフィナーレと同じく、彼女にも壮大なフィナーレが訪れたことが分かる。

　また、それとは別にこの曲が彼女の人生を描いているようであると捉えることができるポイントが、「モーツァルトはフィナーレの主題に別の案をもっていた。」（ザスロー　323）という事実である。フローレンスの人生にも、2つのフィナーレを見ることができる。1つはもちろん現実となった、エドワードと別れて音楽に全身全霊をかける人生であり、もう1つは、エドワードと無事結婚していたら、という架空の人生である。どちらも「速く、密度が濃く」（ザスロー　323）明るいフィナーレとなったであろうが、彼女の現実には、エドワードの居ないフィナーレがやってきたのである。小説の最後でエドワードが回想している部分からは、その、もう1つのエンディングの可能性が見えてくる。

> Now, of course, he saw that her self-effacing proposal was quite irrelevant. All she had needed was the certainty of his love, and his reassurance that there was no hurry when a lifetime lay ahead of them. Love and patience - if only he had had them both at once - would surely have seen them both through. (165)
>
> (今となってはもちろん、彼女の控えめな申し出は見当違いのものだ

ったと理解できる。彼女が求めていたのは彼の愛の確かさで、人生は彼らの前に広がっているのだから急ぐことはないと元気づけることだった。愛と忍耐―もしもこの 2 つを持っていたら―2 人はずっと一緒にいられたのかもしれない。）

新婚初夜当時、エドワードが愛情と忍耐を持ちあわせていたら、2 人は無事に結婚していたと思われる。そうすれば、もしかしたら時間が彼らの問題を解決し、2 人の間に子供も産まれていたかもしれないのである。しかし、実際には彼は当時その 2 つを持ってはおらず、立ち去るフローレンスを呼び止めることもせずに、2 人は別れてしまう。ここで示唆されているものこそ、この小説に見られる 2 種類のエンディングの可能性なのである。

他に、この五重奏曲を演奏するために、エニスモア四重奏団に急遽飛び入ることになった新しいヴィオラ奏者の存在は、フローレンスの人生に突如現れたエドワードの存在と重なる。四重奏団でも充分素晴らしい演奏をしていたところに新たに加わったヴィオラは、演奏をよりよいものにはしたものの、決して深入りすることなく、エニスモア四重奏団はあくまでも四重奏団のままであった。それと同じく、音楽だけでも満ち足りた生活を送っていたフローレンスの前に現れたエドワードは、彼女の生活をより幸せなもの、より良いものにはしたものの、最終的には彼女の人生の一部として深入りすることはないままだったのである。また、彼女の家族構成が 4 人であったことも、エドワードがヴィオラ奏者と重なるポイントとなりうる。父親、母親、妹との 4 人構成である家族設定は、四重奏団の 4 人構成と同じであることから重ね合わせることができるだろう。彼女に異様な執着を見せる団員のチャールズが、彼女の父親と重なる存在にも見えてくる。

ポンティング家に入り込んできたエドワードは、“The various household jobs Edward volunteered to do tied him yet more closely to the Pontings.”(116)(数々の家事を進んでこなすことで、エドワードはポンティング家と密接につながっていた。)とあるように、家仕事を手伝うことでポ

ンティング家と親しくはなったものの、フローレンスとの結婚が破綻した結果、溶け込むことはできなくなった。フローレンスの家族にとってエドワードは違う世界の人間だったであろう。娘の婚約者であった彼は田舎者で食事や生活に無知なところはあるものの、勉強熱心で政治討論の相手としてはそれなりの役目を果たすことから、気に入られていたようである。それでも、最終的にポンティング家の人間と家族関係を作り上げることは出来なかった。ここでも、彼の存在が四重奏団に入れなかったヴィオラ奏者と重ねられるという証明がなされているのである。

フローレンスはエドワードと出会うまで、音楽以外に心を傾けるものがなかった。一般的な人間ならば心を許し、何でも話す間柄でもおかしくはない家族という存在に対してさえ、“As always, Florence was adept at concealing her feelings from her family.”(50)(常に、フローレンスは家族に対して自分の感情をうまく隠していた。)と述べている。また、音楽に対して情熱はあるものの、四重奏団のメンバーに対しては、リーダーであるという自覚からか、自分の意志を固く貫くことだけに集中し、馴れ合いの関係を持ってはいなかったようである。さらに学生時代の友人達に対しても、“They all knew each other, and were too eager with their phone calls and letters. She could not trust them with a secret, nor did she blame them, for she was part of the group.”(11)(彼らは全員が互いのことをよく知っていて、電話や手紙で熱心にやりとりしていた。彼女は秘密を打ち明けられなかった、とは言ってもフローレンスは彼女たちを非難してはいなかった、彼女自身もそうしたグループの一員だったのだから。)とあるように、秘密を打ち明けるほどには心を解き放っていなかった。そこに現れたエドワードは、彼女にとって確実な愛情を持って接することのできる唯一の存在であり、彼が求める性的な関係に応えることが出来ないという悩みを除いては、申し分のないパートナーとなったのである。

エドワードに対して“When the great day came for the Ennismore to make its Wigmore Hall debut, they would play the quintet, and it would be especially for him.”(127)(エニスモア四重奏団がこのウィグモア・ホールでデビューす

るという素晴らしい日が来た時は、この五重奏曲を演奏する、特別に彼のために。)と約束をしたフローレンスは、彼と別れた後であるにも関わらず、デビュー公演で約束どおり、この五重奏曲を演奏する。ここから、完全に1 つになることはできなかったものの、彼女にとってエドワードが、人生を豊かにした大切な存在であったと言うことだけは読み取ることができるのである。音楽以外のエドワードと言う 1 人の人間に愛情を持ち、心を解き放ったからこそ、彼女のヴァイオリンには音楽ばかりでなく人生に恋をしているようだ、という批評を得るメロディーを紡ぎ出すことができたのだろう。こうした点から、この曲が彼女の人生をそのまま表しているということが分かる。

一方、エドワードについても似たことが言える。彼が好んで聞いていたのはロックンロールであった。フローレンスに自分の好きなロックンロールを聴いてもらおうと、エドワードがチャック・ベリー(Chuck Berry)のレコードを持ってくる場面がある。チャック・ベリーは、ロックンロール生みの親の 1 人とされているギタリストで、ジョン・レノン(John Lennon)は彼について、“If you tried to give rock and roll another name, you might call it ‘Chuck Berry’.”(もしロックン・ロールにほかの名前を付けるとしたら、おそらく「チャック・ベリー」と呼ぶだろう。)と述べている。また、それを証明する要素として、彼のギター・リフやダック・ウォークは、後のロック・ミュージシャンに多大な影響を与えている。小説内に出てきた「ロール・オーバー・ベートーヴェン」(“Roll over Beethoven”)だけでも、有名なところではビートルズ、そして日本ではハイロウズ(↑THE HIGH-LOWS↓)がカヴァー曲を発表している。

しかし、この小説の中で、フローレンスはロックンロールについて、“When the tunes were so elementary, mostly in simple four-four time, why this relentless thumping and crashing and clattering to keep time?”(127)(メロディーはとても初歩的で、ほとんどが単純な 4 分の 4 拍子。どうして絶え間なくドシドシ、ガタガタと拍子を取っているの？)と言っている。クラシックがいくつかの楽章に分かれ、変化に富んだ音色を特徴としているのに対し、

ロックンロールは同じような音の並びを単調に続けているだけの音楽なのである。それと同じように、彼の人生は、“. . . it seemed to him that an explanation of his existence would take up less than a minute, less than half a page.”(163)(彼の生活を説明するのに、1 分も必要とせず、半ページにも満たないだろう。)こう本人が自覚するほど単調なものとなった。同じメロディーを繰り返すように、女性と何度か恋をして、エンディングに近い場所で盛り上がるサビのように、1 度だけ女性と結婚をしている。つまり、フローレンスの、常に上を目指し上昇していこうとする人生とは反対に、大きな盛り上がりを見せることもなく、単調に過ぎていったのが彼の人生なのである。

エドワードがフローレンスに聴かせたチャック・ベリーのバンドは、ロックバンドについての知識のないフローレンスに“What was the point, when there was already a rhythm guitar, and often a piano?”(127)(何が目的なの、常にリズム・ギターがあって、時にはピアノも入っているのに。)と言われているが、実際にはボーカルとギター、ピアノ、ベース、ドラムの 4 人構成である。つまり、ボーカルを 1 つの楽器と捉えると、楽器の種類としては 5 つから成り立っているのである。フローレンスの家族が四重奏団と同じ 4 人構成である一方で、エドワードの家族はエドワードと双子の妹、そして両親という 5 人構成である。双子の妹が常に一緒に登場し、2 人の違いや個性といったものが取り上げられないところを見ると、この双子はまるで 2 人で 1 つのように描かれている。5 人構成なのにまるで 4 人しかいないような家族、一方で 4 人構成なのに 5 つの音が聞こえてくるバンド、という点で、エドワードの家族とロックバンドに似ている部分が見受けられるようである。つまり、フローレンスだけでなくエドワードもまた、音楽と関連づけられているであろうことが分かるのである。さらには、小説自体がチャック・ベリーのバンドの楽器の数と同じ 5 つのパートから成り立っていることからも、決してロックンロールが蔑ろにされているわけではないこと、クラシックだけが小説に影響を与えているわけではないことが推察できる。

しかし、ロックンロールについては、クラシックほど小説内で直接言及されていないうえ、クラシックほどはっきりとは関連性が示されていない。小説の描き方を見ると、2 人の晩年についてはエドワードの目線からしか語られていないため、彼の方が小説の中心であるかのように感じられるが、マキューアンの音楽の構成上、そして主題上の取り扱い方を見ると、『初夜』の中でより重要なのは、やはりクラシック音楽の方であり、つまり、中心として描かれているのはフローレンスの方なのだという捉え方ができる。このことを確実にするためにも、弦楽五重奏曲第五番ニ長調は小説内の至るところに登場し、曲の内容についても触れられる必要があったのである。

以上の点より、モーツァルトの弦楽五重奏曲第五番ニ長調は、エドワードが感動したクラシック音楽の 1 つであるというだけでなく、彼女のヴァイオリニストとしての才能が発揮された曲であり、また、まるで彼女の人生そのものを描いた曲のようであることが分かる。このようにして、構成上のみならず登場人物の人生そのものにおいても関連性を示唆することで、音楽が『初夜』の主題を支える重要な役割を担っていることを示しているのである。

結論

フローレンスは、1960 年代という英国が解放を迎えた時代に、女性としては先進的な自己実現を果たした。それは彼女の、エドワードが象徴する因習的な男女関係からの解放という側面も持っていたのである。

第 1 章で述べたように、フローレンスとエドワードが結婚した 1962 年という年は、英国にとって大きな意味を持つ年であった。詩人フィリップ・ラーキンが詩の中で述べたように、この年は性の解放が叫ばれる直前だったのである。『チャタレー夫人の恋人』が無修正版で発表されたり、ビートルズがデビューを飾ったりと、性というものに対する認識を変える出来事が次々と起こり、若者の行動や思考を変化させていった。その一方で、政治的にも、ハロルド・マクミランの登場によって英国が威厳ある大英帝国

という考えから脱し始めた時代だったため、この時代に英国が大きく変化したと捉えられているのである。マキューアンは、そうした時代に彼らの新婚初夜をあてることで、この小説を読む、男女の関係や結婚観といったものに対して自由な思想を持つ現代の読者に対してアイロニーを感じさせることに成功したのだ。

第2章では、小説内において、フローレンスが幼少期に父親から性暴力を受けていたのではないかと推測できる箇所を裏付けるために、マキューアンが過去の作品で取り扱ってきた男性の無意識の欲求と子供の性体験について、フロイトの精神分析理論を取り込みながら説明した。センセーショナルになりがちな性という問題に対し、マキューアンはフロイトを利用することで、リアリティーを失うことなく、読者がアイロニーを感じることのできる小説を描いているのである。過去の作品においては男性目線でこのテーマを扱うことの多かったマキューアンが、『贖罪』を経て本作でついに、女性の視点からこのテーマを描いたのである。幼少期の父親からの性暴力、そしてエドワードとの性的関係と、それにより経験した結婚破棄という人生の挫折を乗り越えることで、彼女は女性音楽家としての成功を収めたのである。

そして、以上のことを踏まえ、第3章ではフローレンスのヴァイオリニストとしての自己実現と社会的な成功について考察を進めた。当時の英国において女性がクラシック音楽界で成功を収めるというのは簡単なことではなかった。しかし彼女は、愛する男性との結婚破棄という経験をエネルギーに変え、自己の欲求を音楽に昇華することに成功したのである。彼女がヴァイオリニストとしての名声を手に入れることができたのは、性という解決できない悩みを抱えた婚約相手から解放され、音楽にすべてを捧げることができたからなのである。

また、この小説のいたるところで見受けられるモーツァルトの弦楽五重奏曲第五番ニ長調との間テクスト性に触れることで、この小説がフローレンスを主体として描かれたものであることの証明を行い、1960年代における女性の自己実現というテーマが基調となっているという裏付けをした。

読者は、この2人があと数年遅く生まれていたら、現代に生きていたら、という考えを持ちながら本作を読むことになるであろう。しかし、1962年という時代設定により、マキューアンは男女関係の認識の相違というアイロニーを感じさせるだけではなく、音楽による女性の自己実現という、1960年代当時においては先進的なフローレンスの功績を描き上げたのである。

注

　引用部分の固有名詞を邦訳するにあたって、それぞれ、宮脇孝雄訳『異邦人たちの慰め』『セメント・ガーデン』、小山太一訳『アムステルダム』『贖罪』、村松潔訳『初夜』を参考にした。その他については拙訳。

参考文献

Childs, Peter. *The Fiction of Ian McEwan.*
Hampshire: Palgrave, 2006.
d'Ancona, Matthew. "The Magus of Fitzrovia."
The Spectator 7 April. 2007.
<http://www.spectator.co.uk/print/essays/28945/the-magus-of-fitzrovia.thtml>
Foden, Giles. "Noughties so far: the book"
The Gardian 2 January. 2008.
<http://www.guardian.co.uk/books/booksblog/2008/jan/02/noughtiessofarthebook?INTCMP=SRCH>
Groes, Sebastian. *Ian McEwan.*London: MPG, 2009.
Hopkins, Eric. *The Rise and Decline of the English Working Classes 1918-1990 A Social History.*
London: Weidenfeld and Nicolson, 1991.
Ingersoll, Earl, G. "The Moment of History and The History of the Moment: Ian McEwan's *On Chesil Beach*"
The Midwest Quarterly. Pittsburg: Winter 2011. Vol. 52, pg. 131-149.
<http://proquest.umi.com/pqdweb?did=2263886801&sid=2&Fmt=3&clientld=10158&RQT=309&VName=PQD>
Larkin, Philip. *High Windows.* London: Faber, 1974.
Lodge, David. *The Art of Fiction.* London: Penguin, 1992.
McEwan, Ian. *The Cement Garden.* London: Vintage, 1997.

---. *The Comfort of Strangers*. London: Vintage, 1997.

---. *First Love, Last Rites*. London: Vintage, 1997.

---. *Atonement*. New York: Anchor, 2003.

---. *Saturday*. London: Jonathan Cape, 2005.

---. *On Chesil Beach*. London: Vintage, 2007.

Office for National Statistics. “Marriages 2009” 30 March. 2011
<http://www.ons.gov.uk/ons/rel/vsob1/marriages-in-england-and-wales--provisional-/2009/marriages-summary.html>

Roberts, Ryan. *Conversations with Ian McEwan.*
Mississippi: University Press of Mississippi. 2010.

Toibin, Colm. “Dissecting the Body” London Review of Books
26 April. 2007
<http://www.lrb.co.uk/v29/n08/colm-toibin/dissecting-the-body>

Walter, Natacha. “Young love, old angst.”
The Guardian 31 March. 2007.
<http://www.guardian.co.uk/books/2007/mar/31/fiction.ianmcewan/print>

青山　吉信・今井　宏編『概説イギリス史［新版］』
東京：有斐閣、1991 年

アレクサンドリアン、サラーヌ『骰子の 7 の目　シュルレアリスムと画家の叢書④マン・レイ』宮川淳訳
東京：河出書房新社、2006 年

梅本　浩志『チャタレイ革命―エロスを虐殺した 20 世紀―』
東京：社会評論社、2000 年

海老沢　敏『モーツァルト研究ノート』
東京：音楽之友社、1973 年

小此木　啓吾『フロイト思想のキーワード』
東京：講談社、2002 年

河村　貞枝・今井　けい編『イギリス近現代女性史研究入門』

東京：青木書店、2006 年
ギリス、R、ジョン『結婚観の歴史人類学―近代のイギリス・1600 年～現代』北本正章訳
東京：勁草書房、2006 年
クラーク、ピーター『イギリス現代史 1900-2000』
西沢保他訳　名古屋：名古屋大学出版会、2004 年
コフマン、サラ『女の謎―フロイトの女性論』鈴木昌訳
東京：せりか書房、2000 年
齋藤　勇編『図説心理学入門［第 2 版］』
東京：誠信書房、2006 年
ザスロー、ニール『モーツァルト全作品事典』
カウデリー，ウィリアム編　森泰彦監訳
東京：音楽之友社、2006 年
下坂　幸三『フロイト再読』中村伸一・黒田章史編
東京：金剛出版、2007 年
妙木　浩之『エディプス・コンプレックス論争　性をめぐる精神分析史』
東京：講談社、2002 年
手塚　リリ子・手塚　喬介編『想像力の飛翔―英語圏の文学・文化・言語―』
東京：北星堂書店、2003 年
西園　晶久監修『現代フロイト読本 1』
東京：みすず書房、2008 年
橋本　宏『D・H・ロレンス研究―その生涯と作品』
東京：鳳書房、2000 年
浜島書店編集部編『ニューステージ世界史詳覧』
名古屋：浜島書店、2003 年
ザ・ビートルズ『THE BEATLES 1』 CD. EMI ミュージック・ジャパン、2000 年
広田　寛治『ロック・クロニクル 1952～2002　現代史のなかのロックンロ

ール』東京：河出書房新社、2003 年
フロイト、ジークムント『フロイト全集 8』
中岡成文・太寿堂真・多賀健太郎訳
東京：岩波書店、2008 年
――『フロイト全集 18』本間直樹・家高洋・太寿堂真・
三谷研爾・道籏泰三・吉田耕太郎訳
東京：岩波書店、2007 年
ホフマン、フライア『楽器と身体　市民社会における女性の音楽活動』阪井葉子・玉川裕子訳
東京：春秋社、2004 年
マキューアン、イアン『異邦人たちの慰め』宮脇孝雄訳
東京：早川書房、1994 年
――『セメント・ガーデン』宮脇孝雄訳
東京：早川書房、2000 年
――『アムステルダム』小山太一訳　東京：新潮社、2005 年
――『贖罪』小山太一訳　東京：新潮社、2008 年
――『初夜』村松潔訳　東京：新潮社、2009 年
モーツァルト、ヴォルフガング、アマデウス「弦楽五重奏曲　第 5 番　ニ長調　K.593」『弦楽五重奏曲集』録音：1968 年　CD.ユニバーサルミュージック、2005 年
ラーキン、フィリップ『フィリップ・ラーキン詩集』
児玉実用・村田辰夫・薬師川虹一・坂本完春・
杉野徹訳　東京：国文社、1998 年
ランク、オットー『文学作品と伝説における近親相姦モチーフ　文学的創作活動の心理学の基本的特徴』
前野光弘訳　東京：中央大学出版部、2006 年